

全国邪馬台国連絡協議会 基本理念	1
全邪馬連・新体制に寄せて／大会を振り返る／奈良文化財研究所に対する情報開示請求についての報告	3
顧問投稿	4
壺岐 一郎、岩元 正昭、小田 静夫、島津 義昭、関 裕二、宝賀 寿男、森岡 秀人、安本 美典	
会員投稿	17
伊藤 雅文、槌田 鉄男、蓮沼 啓介、福島 巖、山科 威、山田 昌行	
特別投稿	21
内野 勝弘	
わが図書を語る	24
池間 忠次、柴田 克彦、槌田 鉄男	
会員募集のお願い	24

全国邪馬台国連絡協議会(全邪馬連) 2020年度(令和2年度) 基本方針 会長 井上修一

運営理念

1. 和を以て貴しとなす。(組織の精神論)

- ・聖徳太子のこの言葉には前段があります。即ち「衆議を尽くせ」とあるのです。よく議論し、意見を出し尽くした上での「和」なのです。議論の結果、お互いに確執を醸したり、恨みを抱くような事があつては、組織は継続しません。我々のような団体には特にその精神が必要です。「和」・「礼節」・「尊厳」を保ち、古代史の解明を通じて、会員同士が楽しく和やかな場を持てるよう努力したいものです。

2. We are on the same boat. (組織の体制論)

- ・当会の設立趣旨と運営理念の「和」を尊び、本部と支部が一体となって活動の輪を広げましょう。本部と支部の役割を明確にして、可能な限り本部は支部を支援します。

<役割>

- ・本部の役割……基本方針作成、ビジョンの推進、古代史の解明のため研究者、研究機関との連携、運営資金の確保、会長、副会長の積極的営業活動、本部と各支部との連携。
- ・支部の役割……支部方針、会員募集と維持策、支部の自主性を高め独自に経営できる体制の確保。

3. 腹が減っては戦はできぬ。(組織の財政強化)

- ・いかなる組織であっても、最低限の経済的な保証が無ければ活動はままなりません。現在の会費収入以外に、会の歳入となる方法を模索し、実施します。



運営方針

1. 全国大会、地区大会、発表会、見学会など

- ・全国大会は4地区を一巡したが、各支部とも、本部からの支援金(20万円)で辛うじて運営可能だった。これは今後の収支面での課題を残した。一巡を機に、新たに、本部と地域支部が一体となって、今後全国大会をどのように運営してゆくか検討したい。その為に、早期に体制を整え、夏頃を目途に具体化に着手したい。
- ・地区大会は、原則担当支部にその運営は任せるが、講演会、発表会、見学会、歴史旅行、研修会や会員アンケート等を企画・実施する。

2. 各種古代史団体・団体員(加入、未加入団体)との交流と勧誘

- ・当会は日本初めての全国的古代史団体である。各団体は古代史解明の方法・結論は勿論異なるが、弊会設立趣旨の「全国ネットワーク」を見直し、真に各地域団体と連携、交流を深め、未加入古代史団体・会員を勧誘し、更なる古代史の全国ネットワークを作り、国内の古代史ファンの輪を広げる。

3. 今年度プロジェクトチーム・ワーキンググループ(本年度は凍結)

2018年度から下記ワーキンググループを設置してきているが、ほとんど進展せず活動が停止している状態である。新たに発足できるようになるまで本年度はプロジェクトを凍結する。

- ① 年輪年代と科学的年代論……現在の奈文研との対立型から今後は他の研究機関、大学等との連携をはかり、情報公開請求とそのデータの解析、検証、その利用方法を探る
- ② 庄内式土器研究……実質の責任者不在、テーマも含めて再度見直し
- ③ 漢鏡7期の研究……実質の責任者不在、テーマも含めて再度見直し

4. 全邪馬連の会員拡大と財務体質の改善

- ・全国組織の理念をもってスタートしたが、年間会費収入は100万円に満たない弱小組織である。
研究費や調査費、支部助成金などはほとんどなく、諸業務は無償ボランティアにゆだねている状態である。収入源は会費が主である。今後は会費とともに講演会収入、公的機関からの助成金、企業団体からの賛助金、広告収入など多様な収入源を探り諸プロジェクト推進費、研究費、調査費など解明に必要な経費の捻出を図る。
- ① 新規会員獲得と現会員の維持
有効登録会員(2020年3月31日で290名)は、ここ数年300名前後である。将来的には500名を目指す、一方において、高齢化などで既存会員の退会も一部予想され厳しい状況である。
今後とも 会員増強を図り、会員の満足度を高め、各種大会、発表会、見学会などのイベントと広報活動に努め、新規会員獲得と現会員の維持を図る。
- ② 新たな収入源を確保する賛助会員制度等を設計する。
個人会員の年会費と大会参加費収入が会運営の基盤だが、財政基盤を更に強化するため、以下を実施する。
 - ・公的機関、自治体への長期的アプローチを進め助成金、補助金の捻出を図る。
 - ・企業、個人からの助成金、補助金、寄付金の依頼を行うため会報、講演会レジメ広告、案内資料広告などの広告収入を進める。
- ③ その他の収入源確保のための立案

5. 広報活動の充実(ホームページ、会報、メルマガ、講演のYouTubeなど)

- ① HPの更なる充実。支部独自のHP開設。HPでの会員論文発表「私の邪馬台国論・古代史論」をさらに推進する。自説を発表したいとの意欲を持つ会員は多い。
- ② 会員へ毎月配信しているメルマガの更なる充実。大会ビデオ映像の会員限定配信、研究発表会のビデオ一般公開は継続する。なお、大会ビデオ映像は、事前に講演者の了解を得て一般公開する。
- ③ 機関誌の発行
会報「邪馬台国新聞」は内容が充実し好評であるが、内容をより改善して、当面は年2回発行を継続する。会員からの原稿の募集、出版社(梓書院)との提携「季刊邪馬台国」の活用。
広告費収入確保のため、企業、個人名刺広告など……今後の重要テーマであり本部での検討事項。

6. 組織、会議体の運営、会員名簿管理(メルマガリスト、理事メルアドリスト等の最新版維持等)

総 会 令3年4月中旬～5月中旬への早期開催を検討。
理 事 会 年4回から総会後の理事会を除き年2回にする(9月、3月頃)。
執行委員会 理事会に併せて年4回から年2回とし、同日開催も模索する。
会員原簿メンテナンス体制の再構築……

会員情報(メルアド等) 変更の伝達ルールと会員管理責任者の権限強化。

7. 法人化(一般社団法人またはNPO) について

全邪馬連の社会的信用と全国基盤づくりの為には法人化は進むべき道ではあるが、法人化には資金面、会計上などのハードルがあるので本年度は凍結し準備期間とする。 以上

全邪馬連・新体制に寄せて

福岡県朝倉市長 林 裕二

今般、貴会が体制を刷新し、新しいスタートを開始されると聞き及び、嬉しくまた頼もしく感じております。新会長の井上修一氏も九州支部長の井上悦文氏も、今はそれぞれ大阪府と大分県の在住ですが、御両人とも元々は朝倉市のご出身であり、古代史研究に深い造詣と知識をお持ちの事は周知の事実です。これを機に、小職も全邪馬連の会員に加えて頂き、古代史研究のご指導を頂ければ幸いです。周知のように、本市は安本美典博士の「邪馬台国＝甘木・朝倉説」の本家本元であります。その真偽はともかくとして、新しい体制の元、広く古代史研究の裾野が広がってゆく事を願ってやみません。

令和二年四月吉日



大会を振り返る

① 9回東京支部大会(2019. 5. 11)

「開発者に聞く！ 年輪年代法」 講演者：光谷拓実先生(奈良文化財研究所客員研究員)

年輪年代法は樹木年輪を使った年代測定法で欧米を中心に高精度の自然科学的年代法として歴史的研究に広く応用されている。わが国では光谷氏が1980年から40年にわたり研究を進めヒノキ年輪を使って実用化に成功した。

これらの研究データについて鷺崎弘朋氏は、10年前から年輪年代法論文で「光谷氏の年輪年代法の標準パターン図のうち1985年に作成したヒノキの旧パターン(BC317～AD1984)は飛鳥時代で接続に失敗し、AD640年以前は100年狂っている。ただし木曽系ヒノキの新標準パターンは正しい」とし、法隆寺、紫香楽の宮、東大寺正倉院等の「年輪年代法年輪年代測定値と文献の整合性一覧表」をもとに「飛鳥・奈良時代100年遡上論」を展開している。

そこで、全国邪馬台国連絡協議会では昨年5月に光谷先生をお呼びし年輪年代法の講演会「開発者に聞く年輪年代法」の講演会を開催した。鷺崎氏欠席の中、光谷氏は鷺崎氏からの質問、疑問に下記回答を行った。

鷺崎氏の論文を検証の結果100年狂っていると言われる旧標準パターンと鷺崎氏が正しいとする新パターンは、t値で見ると極めて同調性が高く問題視されている平城京跡のE、Fパターンの年代照合を新旧標準パターンで行うと双方とも高いt値が得られ新旧パターンでの強い一致を示す。また法隆寺、紫香楽の宮の多数の試料の中での100年の誤差は旧パターンの誤差ではなく、樹脂型、辺材型、心材型など芯に近づくほど年代が古く出る木材の木取りの違いである。同じ木材でも心材型の試料ほど100年～300年の差が出る等反証した。

また会場からは今回光谷先生が検証に使用した新旧標準パターン(G、H)の第三者検証のため、基礎データ資料の公開要望も出された。一般公開によっては光谷先生には今後の研究の妨げや、更なる煩雑さや質問要求が増えることも想像されるが長年のご苦勞が実り、今後全国の多くの研究員が年輪測定法の検証、普及、発展のためにも、また不信感を払拭するためにもぜひ標準パターンの情報の公開を切に願うものである。

② 第1回近畿東海地区歴史講演会(2019. 12. 7)

「邪馬台国はどこだ？」 講師：石野博信先生(畿内説)、安本美典先生(九州朝倉説)

畿内説支持者と九州説支持者が拮抗する参加者の中での両論対峙する講演会を設営したことは、まさしく全

邪馬連の存在意義をアピールするものでは無かったか？ アンケートからもこの試みを支持する意見が目についた。

奈良県のど真ん中、大和高田市で開催したこの講演会には、同日に関西で7つの大きな歴史関連の催しがあったにも関わらず、355名の参加者を得て、支部としては成功裏に終了した。石野先生は、考古学の立場から土器等に関する説明が多く、邪馬台国が吉備から纏向へ来た可能性についての論旨は、必ずしも参加者に理解されたとはいえないかもしれない。アンケートにもそういう意見が多かった。安本先生は従来からの主張を唱え、纏向遺跡出土のベニバナや桃の種は「邪馬台国＝纏向」の証拠にはならないと力説された。アンケートの結果では、講演前に「邪馬台国はどこにあったと思いますか」という問いに対して九州と答えた人は53%だったが、終了後の同じ質問では56%に増えていた。反対に、奈良県という人は37%から30%に減っていた。これは通常関西で行われるほかの講演会などとは反対の結果となった。これはおそらく、安本先生の講演が関西で初めて本格的に開催されたので、関西の九州説支持者たちがこぞって集合したものと思われる。それが証拠に、講演終了後に著書サイン会が行われたが、安本先生は帰京の時間が迫っているにもかかわらず予定をオーバーして、サインを求める列は1時間も続いた。石野先生は病院から病を押して車いすでの公演だったので、終了後すぐ病院へお戻りになった。当初講演を断念しようかという話も出たが、石野先生が「いや、やる！ 車いすに乗ってでもやる。」と決断された。今回の講演会は、ヤマト説一色だと思われた関西にも、結構な九州説論者がいるのだなと認識させるものになったのではないだろうか。

奈良文化財研究所に対する情報開示請求についての報告

奈良文化財研究所に対する情報開示請求についての報告

全邪馬連で昨年11月に年輪年代の標準パターンの公開請求を求めた件についての独立行政法人国立文化財機構から、「法人文書不開示決定通知書」が届きました。

不開示の理由は、『独立行政法人国立文化財機構における法人文書の開示決定等にかかる審査基準Ⅳ 第5条 第4号関係(事務又は事業に関する情報) ホ「調査研究に係る事務に関し、その公正かつ能率的な遂行を不当に阻害するおそれのあるもの」に該当するため不開示』でした。

顧問投稿

恩師追憶 森浩一さん ～働きすぎの85年

元沖縄大学教授 吉岐 一郎

2013年8月、森さんが亡くなった。

大阪・福岡・北京でお会いした方。内外で多くの方に惜しまれた森さんの追悼会は没年の9月に京都で、暮れに東京で行われた。森淑子夫人を招き、東京・港区での追悼会には長老・大塚初重明治大名誉教授が出席され、私が司会した。午後の講演会は主宰の菊池秀夫氏はじめ、「地域学と町人学者」のテーマで隼人・蝦夷・熊襲・吉備に関わる5人が発表した。ウィキペディアなどによれば森浩一著作などの概要はこうだ。

単著 約60冊、対談 約10冊、シンポ 約25冊、編著 約20冊、長編ビデオ 12巻

周知のように2009年、愛知県春日井市立図書館には「森浩一文庫」が設置され、永久オマージュの光を放っている。

*

勝れて多方面にわたる活動は突出的で他の追隨を許さない。

いくつかの柱をあげておこう。

- ① 青年期に研究会と『古代学』発刊編集をし、続行。堺の旧制中学時代から発掘に目覚め、考古学とほかの研究分野の融合を意図。一方で独自の調査や作文に熱中した。
- ② 早期に三角縁神獣鏡の「国産」(列島産)説を実証。松本清張氏が即、注目。清張氏の生涯サポート役を務め、文献史学と考古学の協同に貢献。
- ③ まめに内外のフィールド調査に歩いた。関西のみならず列島の辺境にも数回以上、足跡をのこした。中国各地・北朝鮮にも足を伸ばした。
- ④ 記紀の考古学的実証を目指し、その中の「事実」と虚構を証明し、天皇陵古墳の学問的名称を提案した。

- ⑤ 「地域学」を提唱、門脇禎二氏と二人三脚、約十年にわたり日本海岸の古代史シンポを主導した。
- ⑥ 東京で追悼会を主宰した菊池秀夫氏や私の扶桑国論ほか、「地域学と町人(民間)学者」を励ました。

*

関西では戦災に遭いながら、家庭の文化が維持されていたと東京育ちの私は見ている。千年の都会文化の集積だろうか。たしか森さんの父君は百貨店の幹部社員と聴いた覚えがある。千年の都に近代文明の開化だろう。新聞・放送なども東京に先んじていた。「商」の都は情報・文化の都に発展したのだ。

1928年(昭和3)生まれの森さんは旧制中学入学の年に太平洋戦争が始まり、すぐ学徒動員の世代だ。大戦後、同志社大学英文科をへて文化史の修士課程修了。高校教諭・大学講師をへて65年、同志社大学専任講師に。この間、学生考古学研究会は古代学研究会に発展・会誌発行・継続に向かう。

東京では井上光貞東大教授が中央公論社の『日本の歴史』第1巻『神話から歴史へ』執筆に考古学サポートを依頼して脚光を浴びる。いわば雌伏の時代が生きていたのだ。出版不況の21世紀から見れば1970年代初めは嘘のような古代史ブームだった。読者は「戦前、騙された国史に自分史を重ねた」実証志向の古代史に魅了された。

森浩一さんは一躍、考古学の寵児になるが、氏は懸命に新しい考古学を求めて苦難の坂を攀じ登る。考古学界のマスコミ利用による「宝探し」=青銅器遺物を優先する傾向に抗して地味な遺跡状況を重視したのだ。因みに畏友・故佐々木稔(秋田出身)は鉄器の研究者だったが、この傾向に警告していた。

関西で黙々と調査・研究を続ける森考古学を東京の井上光貞らはしかと見ていた。東京では古代史の文献と考古学の全体像を把握することは無理だったからだ。この面で、松本清張氏は森考古学と門脇史学に期待していた。清張氏の示唆するところ、門脇・森両氏らと朝鮮半島を北から板門店(38度線)を通り南へ歩いて調べようということだった(1977年暮れ示唆)。当時としては画期的な構想だったといえよう。

人脈と研究会と淑子夫人

旧制堺中学(現・三国丘高校)で森さんは久野雄一郎の1年上だった。私の旧友・久野兄の令弟邦雄氏は考古学者になった。巨大古墳の本場で育ったのだが、奇しくも三宝伸銅という大きな会社の社長をしていて、邦雄氏と共同で銅鐸復元の実験を行い、80年代にアサヒグラフに資料を提供している。森さんは対談『古代の技術』で久野兄を招いている。古代の銅鐸を復元した人は東西に数名いるが最新の精銅技術をもってしても古代の工人に敵わないということだった。

多方面の市民的な研究への協力では、「東アジアの古代文化を考える大阪の会」の松下煌氏(朝日放送テレビ)の月例会参加がある。約30年、暮れのその年の考古学発掘まとめを担当したのだ。森さんは丹念に発掘現場を歩き、数百人の市民に親しく報告した。町人学者の面目躍如だ。松下兄はテレビドラマ監督で私の先輩仲間、顔を生かして高島屋会場などを確保し、のべ15万人を招いていたが惜しくも03年他界した。

一方、森さんは研究室に5人を招き、月例研究会を続けた。

中国古代史の杉本憲司、中国音韻学の森博達、朝鮮古代史の木下礼二、日本古代史の和田萃ら各氏だった。異色の顔合わせで『魏志』の烏丸・鮮卑・東夷伝の勉強会、森さんならではと思わせる。後に森博達氏は『日本書紀の謎を解く 述作者は誰か』(中公新書)で毎日出版文化賞を受けるが、私は20世紀文献史学の画期的な研究としており、大阪に住んだ時に講演をお願いしている。

森さんを囲む輪は枚挙に暇ないが、ここで森淑子夫人をあげておきたい。多年、同志社女子大学教授として働き、繁忙の夫を支えた功労者だ。森さんの晩年、十余年も透析を受けながら取材する夫の杖となり遠く西九州や沖縄・伊江島を調べるサポーターを果たされている。夫人の助力によって夫は古希の定年後にも20冊の著書をものでしたのだ。

献身の研究成果に「市民文化賞」南方熊楠賞

半病人(小生への手紙)でありながら少年のような高い志で高嶺を見つめていた人、魏の曹操の詩を思う。「老驥撫に伏すも志千里にあり。烈士暮年、壯心已まず」(歩出夏門行)この駿馬は既に伏すことはなかった。

考古学の総論は並外れたフィールドワークに支えられる。各論は点の発掘でも得られるが、総論は組み立てから列島全域の開発による現場を見る、物よりもその環境を、その遺跡を入念に見て歩く、炎天下、また酷寒の「考古学現場」を凝視する根気が求められる。町人学者を自称した森さんは終生、わが身を犠牲にして歩き通したのだ。

2012年、多年の考古学・文化史学に対する貢献に対し、南方熊楠賞が贈られ、森さんが笑顔で受賞したのも「町人学者」、市民文化賞だと見たからだろう。森さん他界の前年だった。

関西人の余裕の文化性を物語るエピソードが東京の森さん追悼会で大塚初重教授によって紹介されている。大

戦後、まだ物のないころ、長野県下の発掘に同行した時に料亭で食事をしようと言われ、仰天したという。東京の貧乏生活に耐えていた大塚青年にとっては料亭など別世界だったからだ。森さんはよく歩き、よく話されたが、一面で健啖家だった。1990年代初め、福岡市の『季刊邪馬台国』梓書房は発刊50号記念に森さんを迎え、私が司会しているが、氏は私たちの面前から消えて「自分の甲斐性で」遺跡を歩き、名物を賞味されたようだった。

後輩市民研究者を励ます

森さんは行政や大学の専門家と町の研究者を問わず、創意性ある研究者を激励した。例えば、九州というと東京や大阪では南北300キロを同一の島社会と見がちだが、若手の菊池秀夫氏は中部九州の鉄文化をしっかりと捉えていた。阿蘇周辺の鉄文化が突出しているのだ。森さんは菊池説＝独自文化・熊・襲2族説、呉関連説を鋭く評価した。一方で、1990年代に私の「扶桑国関西説」を認め、以後2冊の著書を贈られている。2010年、『倭人伝を読みなおす』を贈られ、メモに「宍岐さんの扶桑国論、前から注目しています。門脇さんも他界、さみしいことです。」とあった。

町人学者の代表として森さんは江戸時代の青柳種信と原田大六さんをあげている。共に福岡の人だ。原田さんについて本誌9号で紹介したが、まさに「忍」と努力の人だった。早すぎた死、万葉集の考古学的解読が十分の一も進まなかったのが惜まれる。

思えば、先進的な研究者は後輩に隔てなく接し、虚心に評価し、さらなる前進を促したといえる。

ここに改めて森浩一さんに学んだものを継承する責務の大きいことを述べておきたい。

森さんの遺訓に応じて昨2019年10月末、5回目の「扶桑国ミニ・フォーラム」を新橋・生涯学習センターで開催しました。(了)

皇紀はどのように作られたか

北京大学医学部名誉顧問 岩元 正昭

那珂通世の「神武即位年説」は誤りである

明治維新早々の那珂通世の説は「革命勘文」にある鄭玄の注「天道不遠 三五而反 六甲爲一元 四六二六交相乘 七元有三變 三七相乘 廿一元爲一節 合千三百廿年」の原文から1260年に一度(干支一周の60年「1元」×21元＝1260年＝1節)の辛酉の年には大革命があることになり、推古天皇9年(601年)が逆算の基点に当たり、この年の1260年前である西暦紀元前660年に神武天皇が即位したとするものである。

「節」という文字は中国の暦法語で、『周髀算経』の中に始めて登場した。その原文は「陰陽之数、日月之法、十九歳爲一章。四章爲一節、七十六歳。二十節爲一遂、遂千五百二十歳。三遂爲一首、首四千五百六十歳。七首爲一極、極三万一千九百二十歳」で、この訳は「月陽の数、日月の法。19歳は一章と為す。4章は1節と為す。76歳である。20節は1遂と為す。遂は1520歳である。3遂は1首と為し、首は4560歳である。7首は1極と為し、極は31920歳である。」となる。

那珂通世が引く鄭玄の「廿一元爲一節」と言う説が誤りであることが分かる。そもそも一節を1260年とする古代漢籍を見たことが無い。一節は76年である。鄭玄は「七元有三變 三七相乘 廿一」と言っているのだから、元を60年と見做しても「七元(420年間)に三つの變(革命、革命、革運)が3×7＝21有る」、と言っているのである。従って「廿一」語の次には「元」字ではなく「變」字が隠れているのである。つまり「廿一元」語は存在しないのである。従って鄭玄は「廿一元」を一節と言っていないのである。「1260年に一度、干支一周の60年(1元)×21元＝1260年＝1節の辛酉の年には大革命があることになり、推古天皇9年(601年)が逆算の基点に当たり、この年の1260年前である西暦紀元前660年に神武天皇が即位した」と言う説は誤りである。「七元有三變 三七相乘 廿一。元爲一節 合千三百廿年」の「元爲一節 合千三百廿年」部分「元、つまり始まりは一節を為し、千三百廿年を合せる」と言っているのである。

歴史の時間軸を創設する場合、必ずその基点から「一節」、つまり76年を一区切りにして何倍の節の過去を元年にするか、を問題にしなくてはならない。この考えが那珂通世説に欠落している。然るに那珂通世の言う西暦601年は皇紀1261年となり、「76年」では割り切れない。又皇紀1260年を逆算の基点に見做しても「76年」で割ると、「16.57」となり、端数が出る。この点からも那珂通世説は明らかに間違っている。

『日本書紀』の時間軸「皇紀」の元年はどのように作られたか

では「節」の概念が果たして『日本書紀』編者に有ったか。神武天皇の在位期間は76年であるから「一節」で、鄭玄の言う「元(始まり)は一節を為す」と言う句に合っている。又『日本書紀』編纂時にこの概念が存在していたことを明かしている。

「節法」とは古代の暦法である。上に述べた『周髀算経』の「一章」とは19年間に7閏月を置く。しかしこの

暦法は一年の長さを $365 \cdot 1/4$ とする四分暦で、4年に1回の閏月を置けば一応は端数がなくなる。しかし19年間ではこれを更に4回繰り返しても16年で残り3年では、やはり端数が出る。つまり $365 \cdot 1/4 \times 19 = 6939 \cdot 3/4$ となり、日に端数が出る。ところが一章(19年間)を4倍し76年を周期にすると「27759日」となり、朔閏が繰り返され端数がなくなる。従って古代中国では「蓍法」即ち「七十六年法」が採用された。『日本書紀』編纂時にもこの概念が使用されているのである。

皇紀1368年(西暦708年)が神武即位年を辛酉年の皇紀元年に設定する逆算の基点である。その考え方は以下の通りである。

『日本書紀』編纂の時間軸の考え方、つまり神武元年を西暦前660年に設定する逆算の基点は壬申の乱の672年以降であり、『日本書紀』篇の720年までの間に存在する。神武元年はワケ系王朝の上代にネコ系王朝を載せる考え方が成立した後でなくては算出できない。壬申の乱はネコ系とワケ系の権力争奪の大戦である。この戦以降でないとネコ系とワケ系が一系に描かれた皇統譜は存在しない。(注：岩元学説では古代の天皇系譜は二系統三王朝の系譜を直列の一本にまとめたものとする。初代神武天皇を始祖とするネコ系と、第10代崇神天皇を始祖として第15代応神天皇の系統に受け継がれるワケ系とがそれで、二系統は第26代継体天皇において一本の綱に纏われるが、その後も政権内での葛藤は壬申の乱まで続いたとする。)

『日本書紀』の編者は「革命勘文」にある鄭玄の注「天道不遠 三五而反 六甲爲一元 四六二六交相乘 七元有三變三七相乘廿一 元爲一蓍 合千三百廿年」と言う原文を見て、日本を「千三百廿年」以上の歴史ある国として内外に示したかった。しかも辛酉革命説から神武元年を辛酉年に成るように計画した。つまり神武元年の逆算の基点であるの干支の次に来る辛酉年から22巡目(1320年遡る)の辛酉年を神武元年の辛酉年に設定したのである。

しかし、歴史編纂の時間軸設定は蓍法を用いなければならないことを中国から学んでいたから、神武元年はその逆算点から76年周期の倍数年過去に置かなくてはならない。

神武元年から鄭玄の注の言う「1320年」と言う年は蓍法76年の17倍 = 1292年と18倍の1368年の間に在る。歴史を1320年以上の時間軸を作る為には1368年を選ぶことになる。1368年は1320年を「48年過ぎた時点」に在る。一方神武元年を辛酉年に設定すれば、当然1320年も辛酉年である。「48年過ぎた時点」とは「戊申」の年である。この年が神武元年の逆算の基点である。「逆算の基点であるの干支の次に来る辛酉年」までは48年と言うことに成る。つまり皇紀1368年(西暦708年)こそ、神武元年の逆算の基点なのである。

西暦708年(皇紀1368年)は元明天皇の和銅元年である。元明天皇は710年に都を大和の平城に遷し、712年には太安万侶らに古事記を編纂させた。この時神武即位年を決める作業が不可欠になる。『日本書紀』編纂に古事記と言う先行資料を基に「皇紀」を創作したのである。神武即位の逆算の基点を元明天皇の和銅元年に指定したのである。和同開珎鑄造の年である。「和同開珎」の「和同」とは『禮記』の「天地和同、艸木萌動」から引用したと考えられる。「ネコ系王朝の臣」と「ワケ系王朝の臣」との融合、和合を祈念し、神武天皇の即位年を設定したモノと考える。(了)

3万年前の航海実験成果から

東京大学総合研究博物館研究事業協力者 小田 静夫

はじめに

2016年4月、国立科学博物館人類史研究グループ長の海部陽介博士らは「祖先たちは海を越えてきた」という前提に基づいて、「3万年前の航海 徹底再現プロジェクト」を立ち上げた。これはアフリカで生まれた私達の直接の子孫である「ホモ・サピエンス」(現生人類)は、「第二の出アフリカ」でユーラシア大陸に広く拡散した。彼らは45,000年前に、ヒマラヤ山脈の北と南コースでアジアの最南端部(太平洋岸)に到達した。その後、日本列島に38,000年前頃に「海を越えて」到達したという、日本人渡来ルートの解明を探る壮大な検証実験であった。台湾から与那国島へ

2016年7月、まず沖縄県の「与那国島から西表島」への航海実験が行われた。渡航具は地元で製作した、「草束舟」2隻であった。渡航は手漕ぎで75キロの「黒潮海域」を28時間で航行する予定であったが、草束舟は黒潮潮流に流されるとともに、また夜間の航行は危険が伴う可能性から行われなかった。(失敗する)

2017年6月、こんどは台湾で「竹筏舟」を製作し、「台湾から与那国島」への航海実験を行うことになった。しかし竹筏舟は浮力、安定性と耐久力には優れていたが、速度が遅く黒潮の流れを越えることは困難であった。(失敗する)

この二つの体験から、グループ長は「草と竹は舟ではなく、漂着物であった」と述べている。

2017年9月、石川県の能登で、旧石器時代の「刃部磨製石斧」を模して製作した石斧で、大木の伐採実験を行った。

2017年10月、福井県の若狭湾で、縄文時代の「模造丸木舟」を使用して、浮力実験などを行った。

2018年6月、能登のスギ材を使用し、東京上野の国立科学博物館入口で「丸木舟の製作実験」が公開された。

2019年7月、今回の本番である「台湾から与那国島」への「航海実験」が行われることとなった。出発地点は黒潮の潮流を考慮して、やや南側の海岸部から2隻の「丸木舟」で、200キロの黒潮横断の旅に挑戦した。そして7日～9日の二日間で、無事に与那国島に到達した。

こうして、手漕ぎ舟では困難とされた「黒潮激流」（流速約4ノット）を横切る航海実験を、訓練で熟達した乗組員たちと、丸木舟を使用して無事に成功したのである。

旧石器人は丸木舟を使用したのか

今回の3万年前の航海実験は、草束舟や竹筏舟ではなく「丸木舟」で成功した。しかし旧石器時代に、丸木舟が存在したのであるか。現在までの日本での丸木舟の出土例は、縄文時代早期(7,500年前、千葉県市川市雷下遺跡)が最古で、旧石器遺跡からの発見はない。また世界的に見ると、刳り舟の出現は約1万年前以降の「新石器時代」からである。しかし、日本の縄文時代には丸木舟が多用されているので、旧石器時代に存在した可能性は否定できない。

日本列島への渡来コースは

旧石器時代の日本列島は、北は津軽海峡、対馬海峡、南は台湾海峡、黒潮海域によって本州、四国、九州が繋がっていた「古本州島」と呼ばれる島嶼環境であった。したがって古本州島に渡来した旧石器人たちは、渡島具を用いて「海を越えて」渡来した。現在までの人類学・考古学分野の研究で、渡来ルートは「北海道ルート」「対馬ルート」「沖縄ルート」の三つが想定されている。

北海道ルートは、アフリカを旅立ったホモ・サピエンスたちは、約3万年前頃にはヒマラヤ北ルートで、シベリアのバイカル湖周辺に定着していた。その後、モンゴルを経て中国北部、サハリン・北海道・クリル半島が繋がっていた「古北海道半島」に約2万年前頃には到達し、津軽海峡を渡航して「古本州島」に到達している。

対馬ルートは、バイカル湖周辺のホモ・サピエンスたちが、モンゴル、中国北部を経て、4万年前頃に朝鮮半島に拡散し、やがて対馬海峡から古本州島の北部九州地域に到達している。

沖縄ルートは、アフリカを旅立ったホモ・サピエンスたちは、約5万年前頃にはヒマラヤ南ルートで、東南アジアのマレーシア半島からインドネシア諸島、カリマンタン島が陸地で繋がっていた「スンダランド」と呼ばれる広大な大陸に定着した。やがて広大なオセアニアの海世界への挑戦が始まり、ニューギニアとオーストラリアが繋がっていた「サフルランド」に進出した。一方、スンダランド北東部で海岸適応を果たした海人集団が、世界最大級の「黒潮」（日本海流）海域に旅立ち、フィリピン諸島から香港東湾、台湾を経て、沖縄諸島と奄美諸島が繋がっていた「古琉球諸島」へ到達している。

なお、この黒潮北上コースと、今回の「3万年前の航海実験」のような、中国大陸と台湾海峡が繋がっていた台湾地域から、古琉球諸島への渡来ルートも検討されている。

日本列島人は海洋航海民であった

人類の海洋航海の始まりは、8,000年前(中石器時代)に地中海のエーゲ海周辺での、「黒曜石交易民」の活動が最も古い年代として定説になっている。しかし、約5万年前のスンダランドからサフルランドへの人類の移住が人類学的研究で判明し、この移住には100km以上の海洋航海をする必要があった。また日本でも38,000年前に、本土から30km以上も離れた伊豆諸島・神津島産黒曜石が、東京都や神奈川県、静岡県に運ばれていることが理化学的分析で証明されている。

こうした事実から、旧石器時代にはすでに人類が「海洋航海」を行っていたことは確かである。現在、「海洋航海民」の誕生地域として、アジア人の故郷とされる「スンダランド沿岸部」が有力視されている。その証拠に、その後広大な海世界である「オセアニア」に、この地域から進出する歴史(海のモンゴロイド)が展開されている。

沖縄の旧石器人たち

13～10万年前頃「第二の出アフリカ」を果たした「ホモ・サピエンス」(新人)たちは、ユーラシア大陸の北端に向かって、ヒマラヤ山脈南北の二つのルートで拡散した。南ルートで5万年前に東南アジアの「スンダランド」に到達した新人たちは、やがて人類が経験したことがない「大洋」に初めて乗り出し、4万年前には「黒潮海域」に船出し、フィリピン、香港東湾、台湾を北上し、「古琉球諸島」に到達している。

沖縄の旧石器時代遺跡は、洞穴やフィッシャーなどの「化石人骨」発見地である。したがって古本州島で一般的な台地上に形成された「集落址」などとは異なり、明確な生活遺構や道具類の確認は少ない。僅かに沖縄本島の山下町第一洞穴遺跡(36,000年前)から石器、サキタリ洞遺跡(9,000年前～3万年前)から石器、貝器、貝製釣り針(世界最古例)とビーズ、墓壇、石垣島の白帆竿根田原洞穴遺跡(27,000年前)で風葬遺構などが知られるだけである。しかし「琉球石灰岩」を主体にする沖縄の遺跡は、古本州島が酸性土壌で「自然遺物」(人骨、動

物骨類)が消失しているのに対し、こうした重要な資料が豊富に残る我が国にとって貴重なフィールドでもあった。

沖縄はそれほど楽園ではなかった

沖縄の更新世は寒冷気候で、針葉樹の森と草原にはリュウキュウジカとイノシシが生息していた。旧石器人は落とし穴や罠でこうした動物を、また野山の果実、木の実、草の実などを食糧としていた。しかし、島嶼環境は限られた資源量から生活は楽では無かったらしい。その証拠に港川人(2万年前)の足の骨には、栄養失調などで成長が停止したときに生じるハリス線が何本も認められている。最近の沖縄県立博物館・美術館の山崎真治、藤田祐樹主任学芸員らの発掘調査で、サキタリ洞人たちはシカやイノシシも食したが、大型のモズクガニ、カワニナ、魚やヘビ、カエルなどを主食としていた事実が判明している。

近年、CT撮影や3次元形態スキャナなど新しい人骨計測技術を駆使して、港川人と縄文人、現代日本人の顔など細部に及ぶ比較研究が行われた。その結果、港川人は縄文人や現代日本人と異なる特徴を持ち、DNA分析では現代の沖縄人が、10,500年前にユーラシア大陸の集団と分離したことも判明している。

では古琉球諸島に生活した旧石器人たちは、その後どうなったのか。一説に「絶滅した」との意見もあるが、考古学的資料からは武蔵野台地最古の旧石器群と東南アジアの石器群の類似性が指摘でき、沖縄の旧石器文化もこの文化圏の一部と考えられる。つまり古琉球諸島は、旧石器時代から「黒潮」を介した「南西陸路」「道の島」「海上の道」と呼称できる重要な交通路であった。

おわりに

1961年日本民俗学の父と讃えられた柳田國男氏は、最晩年に柳田民俗学の総決算、遺書とも評された『海上の道』という単行本を著した。柳田は巻頭の論考で「米の種実と稲作技術」が南方から海を渡って、縄文時代晩期から弥生時代初期に渡来したとした。この仮説は「日本人南方起源論」とも言われ、海のロマンと結びつき戦後の日本人の心を魅了したことは良く知られている。しかし現在まで、柳田の仮説は「考古学的資料」からは証明されていない。

1971年東京都野川遺跡の発掘調査で出土した「黒曜石製石器」の理化学的分析で、日本の旧石器人が「海洋航行」していた事実が判明した。分析は東京大学人類学教室の鈴木正男助手がフィッシュン・トラック法で行った結果、2万年前の黒曜石が太平洋上の伊豆諸島・神津島産と判定された。1976年この報告をフランス・ニースで行われた国際先史学会議で国際基督教大学のジョナサン・エドワード・キダー教授が発表すると、ヨーロッパから遠く離れたユーラシア大陸最東端の日本列島で、世界に先駆けて「海洋交通」が有ったことに世界の先史学者たちは驚くとともに信じられないという状況であったという。

こうした研究史があったが、現在では日本最古の旧石器遺跡の年代は、38,000年前の古さで、その初期から「海上航行」が行われた証拠が確認されている。つまり日本人は、島嶼化していた日本列島に「海を渡って」やってきた人びとであった。

今回の国立科学博物館人類史研究グループの「祖先たちは海を越えてきた」という前提に基づく、「3万年前の航海 徹底再現プロジェクト」の実験結果は、われわれ考古学研究者にとって大変参考になったデータであり、ここに感謝の意を示し筆を置くことにしたい。

熊本県山鹿市方保田東原遺跡について — 研究会の発足 —

肥後考古学会 島津 義昭

1 はじめに

熊本県の四大河川(球磨川・緑川・白川・菊池川)のうち、県北の母なる河、菊池川をのぞむ低・中丘陵上には多くの遺跡がある。その流域を代表する山鹿市方保田東原(かとうだひがしばる)遺跡についてのべたい。中流域の右岸にあり、南に菊池川を臨み、北は方保田川にくぎられた標高35mの台地上に広がる弥生時代後期から古墳時代前期にかけての大集落跡である(図1・3)。時期からみて「邪馬台国」や「狗奴国」とも関連ある遺跡であろう。

2 発見の経緯

1972(昭和47)年に遺跡の中に工場造成が計画されたが、その一帯からは多くの遺物が出土していた事などから山鹿文化財を守る会(河村修会長・谷良太郎副会長)が中心となり、山鹿市に本格的調査の実施を要望した。翌年から国庫補助により山鹿市が調査を開始した。これが行政での第1次調査である。その後10年間にわたり調査は継続実施され、9次の発掘調査が行われた。また1980(昭和55)年頃から宅地造成も計画され調査がおこなわれた。

遺跡の発見は1955年(昭和30)年である。発見から64年経ち、今日からは、既に半世紀以上前の出来事となっている。発見後、高等学校考古学クラブの名門、山鹿高校(現・鹿本高校と改名)、鹿本高校や鹿本農業高校が故・原口長之先生、故・隈昭志先生、杉村彰一先生、上妻信寛先生の指導で、石棺や土器の発見のたびに調査を行ってきた。

3 史跡指定

これら多くの方々の力の積み上げが、方保田東原遺跡を史跡の指定とする原動力となった。夥しい遺構・遺物が発見され遺跡の重要性が認識されている。

少なくとも東西330m、南北300mにおよぶ環濠集落跡であることが判明した(図3)。

1985(昭和60)年に、約2.5haが史跡となった。以後、周辺の調査は継続され2006(平成18)年には、さらに史跡の範囲は拡大され現在10.7haが史跡となっている。しかし遺跡の全体面積は、約35haと推定されるが、今日までの発掘調査の面積は1.6ha余で推定面積の4.3%にしか過ぎない。山鹿市はさらに遺跡の公有化(買い上げ)をすすめる予定である。

4 多くの遺構と遺物

今日までの調査で検出した遺構は、環濠、竪穴住居跡424、掘立住居建物跡1、工房(小鍛冶跡1)、土器製作跡1か所、祭祀跡、墓地などである。

環濠を巡らす大集落跡であり、調査トレンチで多くの溝が検出されている。最大の溝は幅8mである。しかし多くの溝の相互の関連は不明であり、その把握が大きな課題のひとつである。埋葬関連には甕棺・木棺・石棺・土壙などがある。

方保田東原遺跡の出土遺物は、多数の土器のほか、鉄鏃・刀子・手鎌・鉄斧などの鉄製品、巴形銅器・銅鏃・小型仿製鏡などの銅製品がある。弥生時代から古墳時代にかけての社会を知る上で重要であることから、2017(平成29)年に、出土品のうち952点が重要文化財に指定された。指定資料の内訳は土器・土製品452点、金属製品371点、石器・石製品54点、貝輪2点、ガラス玉96点。金属製品には巴形銅器や銅鏡、鉄斧や石庖丁形鉄器など豊富である。

指定された遺物は、弥生時代後期から古墳時代前期にかけて繁栄した集落跡からの一括資料である。なお、朱の生産や加工が行われていたこともわかった。遺物の全ては、山鹿市立博物館と遺跡内にある山鹿市出土文化財管理センターに収蔵・保管している。また、調査報告書はすでに12冊が刊行されているが、総括報告書を市教育委員会で準備中である。

5 研究会の発足

このように重要な方保田遺跡群の遺構、遺物について、地元と連携をとりながら、研究をおこない自由・関連に討論し成果をあげ地域研究の進展に寄与するとともに、ひいては日本古代史研究に貢献することを目的として、「山鹿市方保田遺跡研究会」が2018(平成30)年10月20日に結成された。関係者は次のとおりである。顧問・富田克敏(山鹿市博物館名誉館長)、会長・島津義昭、副会長・河村修、富田紘一、監事・佐藤伸二、理事には前田軍治、高木正文、木崎康弘、花岡興史、事務局長・大森勲の諸氏が選出された。

6 方保田遺跡と邪馬台国

菊池川流域に「邪馬台国」を比定する論は古くからあった。発掘調査の進展で、予想を超える弥生後期の有力な大規模遺跡が、各河川流域にあることがわかってきた(図1)。それらを踏まえ伊藤雅文氏は(『邪馬台国は熊本にあった!』2016)では、熊本県北の菊池川・白川・緑川流域の弥生遺跡群を「邪馬台国の都ネットワーク」と

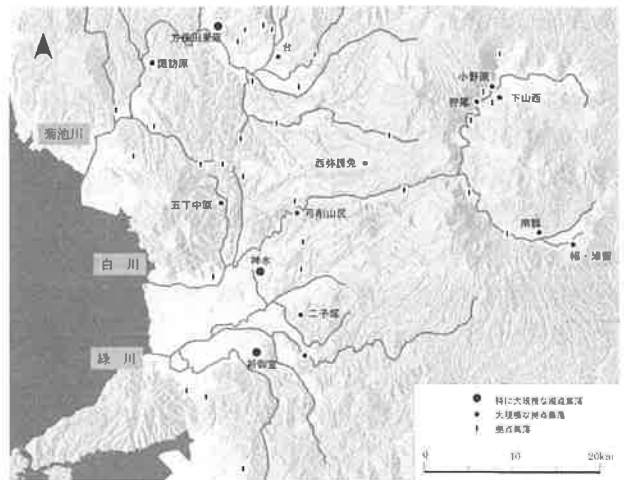


図1 熊本県北部の弥生時代(後期を中心とする)遺跡 宮崎敬士氏(熊本県文化課)作成



図2 投馬国から邪馬台国へ 伊藤雅文氏作成

して、魅力的な試案を提示している(図2)。

また、これらの地域は「狗奴国」であるとする学説も少なくない(菊池秀夫『邪馬台国と狗奴国と鉄』2010 木崎康弘「肥後」成り立ちと菊池川流域の地政学 2018)。これらの論点は機会をみて紹介してみたい。

7 おわりに

菊池川は、その周辺に「肥後台地」と総称される広大な台地を持ち縄文時代から開けた土地柄である。中九州最古の弥生文化もこの地に定着した。これらの特性から菊池川流域4市町(玉名市・山鹿市・菊池市・和水町)は熊本県の協力のもと、「二千年にわたる米作り」をテーマにストーリーを作成し2017年(平成29)年に日本遺産の申請を行い認定された。まさに方保田遺跡群が相当する。

発掘調査は下流域の玉名市大原(おおばる)遺跡をはじめ有力遺跡の調査により、弥生時代から古墳時代への移行の状態を考える好資料が得られた。

山鹿市方保田遺跡郡の研究をつうじて地域の特性を明らかにしていきたい。2020年度には、「硯」の発見を目指して石製品の再検討を行う予定である。

研究会では「山鹿市方保田遺跡研究会ニュースター」(創刊号)を作成しています。入手希望の方は事務局まで問いあわせください。なお、当研究会にはどなたでも参加できます。みなさま方の研究会への参加を期待いたします。

連絡先と情報など

- ・研究会事務所は山鹿市立博物館(〒861-0541熊本県山鹿市鍋田2085)内
電話番号:0968-43-1145 ファックス番号:0968-43-1143
- ・山鹿市立博物館メールアドレス:shakyo@city.yamaga.kumamoto.jp
- ・遺跡や遺物の詳細は次のホームページに詳しい。
文化庁・文化遺産オンライン:<https://bunka.nii.ac.jp/heritages/detail/247451>
山鹿市ホームページ:<https://bunka.nii.ac.jp/heritages/detail/247451>



図3 方保田東原遺跡の全体図(上)と主な出土遺物(下) 東から西をみる 山鹿市ホームページ

雑談のようなとりとめのない話を

歴史作家 関 裕二

考古学界では近年、若手の発言が目立ってきて、これまでの常識が、次々と覆されている。

注目したい人のひとりに寺前直人氏がいる。『文明に抗した弥生の人びと』(吉川弘文館)の著者といったほうが分かりやすいだろうか。この中でヤマト建国に関して、寺前直人氏は、次のように記している。

「近畿地方南部を中心とした列島中央部の人びとは、大陸・半島からもたらされた魅力的な文明的価値体系に抗することに成功した」

この、かつて無い痛快な推理はどうだ。しかも、考古学の物証に裏付けられ、確信に満ちた発言であり、権威ある史学者たちを、ぶった切っている。喝采するしかないし、彼を応援したくなってくる。

弥生稲作文化は、弥生時代の始まりと共にあつという間に東に伝わっていったと信じられていたが、次第に、「ちょっとおかしい」ということになってきた。稲作が伝わったとしても、生活や文化、土器様式などが「縄文的なものに先祖返り」していくことが多かったのだ。だから、「純粋な弥生時代は、北部九州と朝鮮半島南部にしかなかった」という説まで登場している。

弥生時代の文明の利器とみなされてきた青銅器も、縄文的な文化を継承しているという指摘がある。近畿地方や近江、東海地方では、銅鐸が巨大化して、持ち運ぶことができなくなった。首長が威信財として独占できないようにしたのではないかと考えられている。集落、ムラの人びとが、銅鐸祭祀を行ない、強大な権力者を嫌っていたようなのだ。そして三世紀、銅鐸文化圏の人びとがヤマトに乗り込んで、ヤマト建国のきっかけが作られていたようだ。奈良盆地東側に、東海地方の土器が、いち早く持ち込まれていた可能性が高くなってきた(畿内論者の「狗奴国＝東海説」は、どうなってしまうのだろうかという、意地悪な含み笑い。「東海が真っ先にヤマトにやってきた」ことがなかなか認められないのは、これまでの常識がことごとく覆されるからだろう)。

最近、『縄文文明と中国文明』(PHP新書)を上梓した。かねてより、「縄文を世界に広めたい」と活動をされ

ているK氏に、進呈すると、

「昨日ね、ある大学の先生とちょうど縄文文明の話をしていたんですよ。あの先生、縄文文明などなかった、あれは文化だっていいはるんですわ」

と、悔しそうにおっしゃっていた。それで、小生は、

「文明の高さ低さで競ってはいけません。文明など、ろくなモノではないという話を書きましたから」

と伝えておいた。

便宜上、本のテーマに「縄文文明」をあてがったが、縄文人たちは、「文明を拒絶した人びと」だったと思う。岸田秀は、人間は本能を失った動物といい、文明は狂気と喝破している(彼は、世界がなかなか認めない天才なのだ)。

中国は世界でもっとも早く文明を構築して、もっとも長く文明を維持してきたが、これはじつに恐ろしいことなのだ。文明が発達する段階で、森は食べ尽くされる。冶金の燃料となり、生活の必需品となり、砂漠が生まれていく。文明が成長すると人口が増え、戦争が起きる。戦争が強い武器を求める。武器を造るために、森が消えていく。文明は狂気なのだ。

しかし、人類は本能が壊れているから、狂気と知っても、それを押し止めることができない。だから、「魅力ある文明」を拒もうとしてきた縄文人やヤマト人の末裔である日本人が、悩み、答えを見つけなければならないと思い、「縄文文明」の本を書いた。

黒齒常之と勿部珣

日本家系図学会会長 宝賀 寿男

はじめに

古代の日本列島の歴史の流れを考えると、列島内ばかりではなく、目を外に向けて国際的な動向との関係でも考慮する必要がある。とくにそうした配慮が必要なのは、七世紀後半の百済と高句麗の滅亡であり、これら事件に日本の関係者が関わることが多く、列島への影響も大きかった。両国の滅亡により、遺民関係者が日本列島にきた事情もあるが、日本が朝鮮半島まで出兵した百済滅亡とその前後の動きのなかで、中国本土まで行って活動した倭人関係者ではないかとみられる者も史料に見えるので、ここではそうした人々を取り上げることにしたい。そのなかで、とくに「勿部珣」と名乗る者を対象にしたい。

黒齒常之とその活動

勿部珣という人物を知る人は、歴史研究者でもあまり多くないのかもしれない。この者を検討するには黒齒常之という百済の将軍が欠かせず、勿部珣はその女婿とされてる。従って、まず黒齒常之と滅亡前後の百済の動向のほうから述べることにする。

七世紀の後半になって、百済が高句麗と協同して新羅への侵攻活動を続けたことで、危機感をもった新羅では、善徳女王と重臣金春秋(次の新羅王となって武烈王)は、唐王朝に対して強い援軍要請を繰り返した。このため、唐は西暦六六〇年に水陸合わせ十三万という大軍を百済へ向けて差し向け、これに呼応して新羅も、五万の出兵をした。同年三月には、唐の軍勢が山東半島から渡海して百済に侵攻を開始した。百済側では有効な対処策を立てえず、局地戦では奮闘もあったものの、七月には王都泗沘が占領され、義慈王は熊津に逃れたものの降伏し、百済は滅亡した。この戦が終わって唐軍主力が旧百済領を離れると、鬼室福信や達率の黒齒常之、僧道琛などの百済遺臣が立ち上がり、倭国でも百済復興への全面的支援を決め活動する。西暦六六三年には白村江で唐・新羅連合軍に対して決戦に及び、この戦に大敗した倭国の軍兵とともに、亡命する百済貴族やその妻子一族も倭国にきた。百済王に推戴されていた余豊璋のほうは、高句麗へと逃れたものの、高句麗もまた五年後の六六八年に唐の軍門に降って国は滅びた。

百済の遺民の動きを見ると、義慈王の子の扶余隆は、歴代百済国王が唐から与えられていた「熊津都督帶方郡王」に任じられたが、これは名目にすぎない。百済や高句麗(安東都護府・遼東郡王)に関して、滅亡前の冊封国ではなく、唐の羈縻州として旧領域を組み込み、残された新羅(鶏林州都督府・楽浪郡王)も唐の羈縻体制に組み入れるという形で、朝鮮半島全域支配を視野に入れていた。しかし、現実には、百済の旧地は荒廃しており、そこを新羅が占拠して、ついには唐を朝鮮半島から追い出した。

百済滅亡のとき、その臣下たちには階伯などの戦死者もいたが、討死・亡命などをせずに残った百済高官たちが多く新羅に降り、六六〇年の論功行賞で、佐平の忠常などや達率の自簡など百済遺臣(いずれも姓氏が不明)に対し、新羅での地位が与えられたが、これらの子孫は不明である。その一方、倭国への亡命者も多くおり、約三千人ともいわれる。高句麗へも、豊璋を始め有力者が多数逃れたが、その滅亡後に唐に捕虜とされている。

このほか、百濟滅亡時に唐へ直接、連行された王族・貴族も多数おり、王・妻及び四王子、大佐平の沙宅千福・国弁成・沙宅孫登などの重臣・將軍級が約六十人、百姓が一万二千人超とされる(『三国史記』や『旧唐書』『新唐書』)。こうした高官や大勢の人数の連行・亡命の動きから見ると、百濟国の支配層が殆ど根こそぎ、滅亡により消えたと言えよう。

この辺の滅亡後の事情が、西安や洛陽で発見されてきた入唐百濟人の墓から分る面もある。百濟王子扶余隆や、百濟の武将黒齒常之、祢軍など六人の百濟人とその子孫たちの墓が、これまで合計で十か所ほどで発見された。彼らのなかには唐に仕え活動・栄進した者もあったが、出土の九つの墓誌等により三代ほどまでの動向が知られる。中国の山西省太原市晋源区にある天竜山石窟(太原市中心の南西約十七キロに位置する)には、「大唐勿部將軍功德記」という造像石刻(七〇六年に造られた)があることが知られる。

百濟の滅亡のとき唐に帰服して仕えた百濟人が任じた官職では、太子の扶余隆が最も高く、正三品上の光祿大夫、太常卿、使持節熊津都督、帶方郡王となり、その死去後には正二品の輔国大將軍を贈られた。次に、黒齒常之は正三品下の「左武衛大將軍、檢校左羽林軍、燕国公」で、死去の九年後の聖曆元年(六九八)には左玉鈐衛大將軍(正三品上)を贈られ、沙咤忠義や祢寔進も、左右の威衛大將軍となっている。この辺りが、大部族長としての処遇とされる。

黒齒常之は、入唐後に西域関係の軍事で活躍し、右武衛大將軍や燕然道大総管、燕国公となって栄進するも、冤罪を蒙って六八九年十一月に被殺される。その女婿とされるのが勿部珣である。

黒齒常之の出自は、百濟の王族の出ともいわれ、氏の由来は、領地ないし先祖が遠征した地の人々が齒を黒く染めた習俗に因むともいわれる。かつては、その地が倭地の関東とか伊豆諸島とかもいわれ、黒齒国には沖繩、海南島という説までであるようであるが、これが実在した国についての記事ならば、いまは台湾説が多いようであるが、いずれも疑問が大きい。「魏志倭人伝」に見える黒齒国や裸国は、倭地から東南方面に船で一年ほどで行けるという記事があり(種々の解釈があるが)、広義の倭の地域とみられないこともなく、『淮南子』や『山海経』からは、「湯谷」(太陽の昇る地)の上にあつて、稻とか黍を食べ四鳥を使うとも見えるので、そのためか、「黒齒国」は日本の異称かという見方も出ている。

しかし、黒齒氏については、明治期の鈴木真年は、『朝鮮歴代系図』(天理図書館蔵)で高句麗五部のうち、内部(王族)ではない西部に服氏・黒齒氏として掲載しており、その場合には、百濟へはその分かれた一派が行った可能性がある。そうすると、当該黒齒氏ゆかりの黒齒の人々が住む地域は、中国・東北地方(東北三省の地域)にあったということになり、倭地には関係がないことになる。ちなみに、中国の王万邦による『姓氏詞典』(一九九一年刊)には黒齒姓があげられて、国名をもって姓氏となすとあり、「魏志・東夷伝」の上記記事が引かれて、唐のときに百濟西部に黒齒姓があり、唐の燕然道大総管に黒齒常之ありと記される。

現在に伝わる高句麗及び百濟の王家の系譜には、黒齒氏の分岐は見えないこともあり、倭地関係ではないとみておく。齒を黒く染める「鉄漿」の習俗から倭地だとは即断ができないと考える。また、黒齒常之の百濟における官位である達率や「風達郡将」から、これを伊予の「風速郡」を結びつけるのも無理であろう。女婿が倭地関係者ではないかと言って、黒齒常之の官職や先祖までを倭地と関係づける必要はなかろう。

勿部珣とその系譜

さて、ようやく勿部珣まで話しが来たが、彼は、舅と同様、唐では西方などとの軍役で活躍して、右金吾衛將軍・上柱国・遵化郡開国公となったと記事がある。

勿部珣(音は「ブツブ・シュン」か)の「勿部」と解読される姓氏が百濟には見えないこと(その後の中国にも子孫が絶えたか、姓氏が残らない)、「本枝東海」と見える記事、黒齒常之が「風達郡将」を兼任した事情等から、倭地の物部一族の出で伊予の風速国造出身かと推する見方(小野勝年博士の『史林』七七卷三号掲載論考など)もある。

その出身地の確認までは史料からできないが、倭地から出た家で、「勿部＝物部」は妥当そうである。ちなみに、伊予国風速郡出身の物部葉は、百濟救援戦に一兵士で出征して唐軍の捕虜となり、この生活が長かったものなんとか帰国し、持統十年(六九六)四月に、肥後国皮石郡の壬生諸石とともに、追大弔の冠位(冠位四十八階の一つで、前代の大乙上、後代の正八位下に相当)や絲・布・水田などを与えられた。上記の百濟救援軍の後將軍には大山上物部連熊が見えるが、この者は冠位・連姓から見て、中央の物部連一族なのだろうが、系譜不明である。黒齒常之は百濟の王国上層部を構成したのだから、捕虜身分とはいえ、その女婿となる事情などから見て、地方の伊予出身説はおそらく疑問なのであろう。倭国亡命の百濟遺臣たちで主な者の動向は、『書紀』天智十年(六七一)正月条に官位を授かったことで知られるが、そのなかにも「物部・勿部」を名乗るものは見えていない。

軍事氏族としての物部氏は、韓地関係の活動では出てくる時期が遅れるが、六世紀中葉頃の百濟・聖明王の時

に、奈率に物部連用哥多・物部哥非の二名、物部莫哥武や物部施徳麻哥牟がおり（これら四人は名前の共通性から兄弟か）、次の威徳王の時の奈率に物部鳥が見えるなど、百済の重臣としても物部氏は活動したのが知られる（以上は『書紀』）。これらが物部氏のどの系統から出たのかは、現在に残る系図類や『旧事本紀』などから分からない。いま可能性として考えられるのは、継体朝に百済へ副使として行った物部至至連（物部伊勢連父根）の後が百済に残ったことや、使いで派遣された物部韓国連の同族かということである。

後者の系譜については、『姓氏録』では、父祖が武烈天皇時代に三韓に使したことに因んで韓国連（辛国連）を名乗る一派が物部氏族にあり（和泉神別）、同族で摂津神別の物部韓国連もあげられて伊香我色雄命の後とされる。『続日本紀』延暦九年十一月条では、韓国連源の先祖・塩古がこれを名乗ったと見え、「天孫本紀」には物部塩古連公は葛野韓国連等の祖と記される。この塩古連は雄略朝の目大連の子とみられ、聖明王の時に奈率等で見える百済の物部一族の父祖ではなかろうか。

族人では、外従五位下韓国連広足が知られ、いわゆる^{えん}役行者の小角が伊豆島へ配流された記事（『統紀』文武天皇三年〔六九九〕五月条）には、その弟子として見える。約三十年後の天平四年（七三二）十月に広足は典薬頭に任じられ、『藤原武智磨伝』には、当代の名人が列挙されるなかで「咒禁に余仁軍、韓国連広足」があげられる。咒禁については、百済の人、津留^{つるが}牙使主より出づとされる末使主氏が『姓氏録』山城諸蕃に見え、その一族の咒禁師末使主望足も『統紀』に見える事情があるから、韓地由来の技術とも考えられる。

物部連一族から韓地・百済に派遣される者が出て、その後裔が百済に残ったり、一部が日本に帰朝して韓国連を名乗ったりしたものであろう。そうした流れから勿部珣が出たのであろうが、百済が滅び唐の後裔も絶えてか後の資料が見られず、辛うじて上記石刻がその記憶を留めるものとなっている。古代でも、倭人の活動が広範囲に及んだことが分かる。

なお、本稿に多少ともご興味がある方は、昨年末に出した拙著『百済氏・高麗氏』でもこの関係を取り上げているので、ご覧ください。
(令和二年三月記)

日本最古の庄内形甕はいったいどこにあり、どうして生まれたのか

関西大学大学院非常勤講師 森岡 秀人

意識改革としての「庄内形甕」の定立

表題がいきなり問い掛けとなってしまって恐縮だが、この議論に関心のある方は大変多いと思われる。それは「庄内形甕」がいわゆる邪馬台国の時代を代表するような時期の土器で、日常的に煮沸容器として頻繁に用いられたからである。その起源的な濃厚分布地が奈良盆地東南部の纏向遺跡周辺や中河内地域の旧大和川下流の分流域にあることも、比較的知られていることである。ホットな今回の話題は、その甕の古さや概念定義に関する重要な問題を取り上げ、最近の調査・研究動向を踏まえ、「庄内形甕」用語使用についても、読者諸兄に積極的な意識改革を目指してもらおう。なにゆえなら、庄内形甕理解の原理・範疇も流動的な研究状況となっているからだ。

庄内式甕と庄内形甕、「式」と「形」と「型」

まず馴染みの薄い「庄内形甕」と呼んだ用語に関して説明しておきたい。「形」は「型」とは音では全くいっしょであるが、考古学上では厳密に概念原理を踏まえた用語として区分けされている。「型式」（タイプ）の概念ではなく、「形式」（フォーム）の概念が強く意識されている。庄内式甕という呼称がこれまでよく用いられ、今もそう呼ぶ人は結構多いのだが、ここでは庄内形甕と称することにあえて拘る。それはなぜか。通常、型式は遺構・遺物の時間的存在、空間的分布の最小単位に用いられる。個体差、独特の癖を追求すれば、もっと細かく分けられるが、集団を追求の目的とする考古学では、当面個人差、作り手の人物差のようなレベルで土器を分けることは極力避けており、まとまりの最小の大きさとしては型式という概念・定義を常々大切にする。個体識別を限界線まで行うことをいったん留め置き、最小集団が使用した時間や空間を知ることによってエネルギーを注ぐ。一定の形態を目指した時間の長さと同様性のある程度担保された分布領域がセットとなって尊重される。

形式とは型式と似て非なる概念である。機能によるまとまりが時間を超えて変化して持続する状態が重要で、フォームの呼び方で時間的年代的差違をもって型式と名付けられた時間という便宜上の単位が時間的变化としての型式組列を編成し、編年表では旧型式→新型式などによって変化の方向が明示される。そこでだ。庄内式甕は型式という特定の世界から脱却して庄内形甕という長い時間が与えられるようになったのだ。式から形への変化。近畿中部において、これにはさまざまな条件整備が必要だったのである。

庄内形甕認識の要件とは何か

第一には時間軸上における型式変化の実在。これを条件①と呼ぼう。庄内形甕Ⅰ → 庄内形甕Ⅱ → 庄内形甕Ⅲ → 庄内形甕Ⅳ → 庄内形甕Ⅴ。庄内形甕古段階 → 庄内形甕中段階 → 庄内形甕新段階。庄内形甕a型式 → 庄内形甕b型式 → 庄内形甕c型式。庄内形甕A → 庄内形甕B……。型式呼称の統一には至らないけれ

ど、時間軸上での区分と配列、つまり型式編年ができる状態を満足させることが即ち条件①である。それは提唱段階当時の短期間の過渡期を意味した庄内式ではなく、長期間に及ぶ年代の経過を教えている。ことによれば、第V様式期よりも保有時間が長くなるのではないか。それはとりもなおさず大様式としての理解を容認することに繋がる。繋ぐ型式ではなく、連鎖する時間軸上の型式群なのである。

条件②とは何か。庄内形甕という甕形式が他の甕類と弁別できなければ、たちまち歩むべきフォームの路、資格を失う。具体的には、「弥生後期形甕」からの分離、加えて「布留形甕」からの分離である。この3大形式の定立を前提として「庄内形甕」がはじめて存立基盤を持つのである。弥生後期形甕が庄内形甕にすなりと変わるのではない。また、庄内形甕が布留形甕に突如変化するのではない。それぞれ影響は与えてはいるが、漸移的な変化であり、影響を与えた本人たちもまだフォームを保ち持続しているのである。発掘調査現場では、弥生形甕・庄内形甕・布留形甕、この三つの形式が同じ遺構で共存する場合だってある。そういう時間区分が切り取られていると理解すればわかり良い。発掘遺跡・遺構が増加し、土器量が増えると、その諸関係が複雑になってくるのは常識化しているが、庄内形甕というフォームの時間軸を正しく見究め、関係性を大事にして庄内形甕を捉えること、それが条件の②である。

条件③は、庄内形甕へのスライドを示す古手の型式から型式学的変遷を遂げる中心地域の把握である。庄内形甕が基本客体的なありようのまま搬入品で見られる地域は多いが、そこではなかなか形式の成立問題、自立性は証明できない。出自から勢い外れることもあるだろうし、一方で波状的に発生地の中河内が刺激を与えても、在地では型式組列が組み込めず、一過性のあり方を示し、次の型式のものが木に竹を接ぐように再来する運びとなる。幸い起源地の中河内の地域では、最古の庄内形甕から最も新しい庄内形甕まで持続的变化を遂げる要素を型式学的にも層位学的にも追うことが可能であり、それらを基軸とした編年案も構築されている。その変化は有稜高杯をはじめ複数器種の小様式変遷としても掌握が可能であり、弥生後期形甕の型式変化や布留形甕の型式変化ともタイアップする形で共伴関係を容認することができる。相互の関係性の検証が現実化する地域で存続基盤が保証されるのである。

周辺薄甕地帯の盛行と近畿の庄内形甕が成立した理由

初期の庄内形甕が誕生するまでの甕は、弥生後期形甕であり、古くは穂積式とも呼ばれた第V様式甕である。突出した平底を持ち、タタキ成形で製作された甕である。鉢形を基礎として上までタタキによって分割的に製作された土器であり、後半期には口縁部まで体部上半部分を一気にタタキ出して作るように変化する。底部輪台技法の成り立ちについては異論を持っているが、多くは都出比呂志による技法名の創案であって、有効なため多くの研究者がその名称をその後踏襲している。器壁は分厚く、熱効率は悪い。弥生時代後期の近畿のこのような甕は、胴長であったものが進化して球形体部が目指されるようになるが、徹底的に薄い甕を作る方向性からは外れていた。内部事情だけでは庄内形甕のスタートをうまく説明できないのである。

他方、目を転じると、重量が軽く器壁の薄くなったいわゆる「薄甕」と称されるものが弥生後期の吉備・讃岐・阿波・山陰・北陸・東海など近畿外縁部で先に誕生しており、薄甕地帯で最も遅れをとっていたのが近畿中部であった。その軽量薄甕化に大きな影響を与えた地域は、古い庄内形甕が目立って出土する地域の遺跡や遺構一括資料を詮索すれば、明らかとなる。薄甕は石野博信の関心を引き込み、赤塚次郎をして「共鳴現象」と呼ばしめたが、近畿の場合は足並みを揃えるには至らなかったと考える。弥生後期形甕は内面をハケ調整やナデで仕上げしており、ケズリの技法からは縁遠い。その結果、底部・体部ともに厚い甕を製作してきたのである。

最も早くに出現した庄内形甕

以上を踏まえ、最古の庄内形甕は、内面へラケズリを開始していることが定義や概念の重要な取り決めとした。その外観は弥生後期形甕の属性、「く」の字外反口縁、太筋のタタキや平底を有しており、器壁が非常に薄くなっていることを見逃しやしい。それは持ってみると、きわめて軽い。体感によって、庄内形甕の仲間入りを果たしていると判断できる。その証拠に突出する平底ではなく、底径はどんどん小さくなっており、斜め切りでそのまま底面との接点を持つ体部と化している。器形として尖り底が明らかに目指されたものも多く含まれており、外面を縦方向に削る行為も底を意識的に矮小化させることと無関係ではない。しかし、多くのバリエーションが認められ、型式学としてみた場合、あまりにも多様な外観を呈することになる。一見して庄内形甕とは思いが、弥生後期形甕のルールからは逸脱していることは確かである。タタキはまだ太いままであるし、口縁部形態などに庄内風の要素は少ない。それでも最近の研究情勢はこうした甕をもって庄内形甕の出発とみなす研究者が増えてきたことは看過できないことであり、既に大きな問題群として専門誌には特集「初期庄内甕を探る」が編まれている(『古墳出現期土器研究』第六号、古墳出現期土器研究会、二〇一九年)。関川尚功・米田敏幸・西村公助と森岡が執筆した論考が掲載されているが、現状で問題となっていることは、解決の難しいことも数多く含んでいる。先に見た定義に従うとして、庄内形甕が一番に登場した地域はいったいどこか。それは自律

的なものなのか、他律的、外圧的な影響によるものなのか。成因を考えなければならない。古い庄内形甕が存在する旧大和川下流域と奈良盆地東南部、ほぼ同時に成立したのか、河内が古く、大和に影響を齎したのか、時間的な伝播の存否も争点となる問題であろう。甕体部に残るタタキの痕跡は、通常右上がり方向を採るものが河内型、左上がりの方向を採るものは大和型と称されてきた。纏向遺跡の報告書段階から関川が一定の法則性に言及し、分かりやすい分類なので、今でも河内型・大和型の呼称は生きており、使用もされている。土器製作の姿勢とも深く関わる産地呼称として安易に製作場を示した地域性として理解されてきたが、先の論文の多くはそのように単純化することはみんな避けている。河内出土の左上がりタタキ甕の実例や大和出土の右上がりタタキ甕の存在が結構な数認められ、古ければ古いほどその分離や解釈は容易ではない。関川による纏向一式後半、米田による庄内式期一の庄内甕A、森岡・西村歩による庄内形甕古段階古相、寺沢薫による庄内〇式などを併行関係でわかりよく整理することは至難である。それは最古の庄内形甕の認定基準や一括資料の把握、他地域土器との影響関係など、すべてが複雑に絡み合うからである。証明し合える必要な資料のリソース(資源)がまだまだ不足していると言えよう。

大和川水域における初期庄内形甕の生誕

述べてきたような初期庄内形甕は各地にあるものではない。現状でその出現状況を探ると、最も古い様相のものは大和川下流域に当たる大阪府八尾市域の小阪合分流路境界の東郷遺跡・成法寺遺跡・中田遺跡を中心に分布することが判明する。けっして最初から角閃石を多く含む生駒山西麓産に限定して現れるわけではない。米田敏幸は時間的な差は検討の余地があるとしつつも、初期庄内形甕の胎土が沖積地堆積物の特徴を示すことに注目し、始発の土器に対するイメージを塗り替えている。ただし、そのまま生駒山地の土器胎土に変化するわけではなく、遺跡の立地差も多分に関わっており、同時並存の状況も十分考えられる。それでも沖積低地の方がより古い蓋然性は大きい。それは、先にあげた低地の遺跡では、土坑などの共存資料に既に内面ケズリなどが盛用された吉備型甕やそれらとともに流入してきた吉備系器種が顕著に遺存するからである。軽量薄甕の技術を弥生後期形甕製作集団が参照枠として採用の促進を図るとすれば、近い位置にあるまさに吉備型の甕や吉備系の土器が候補にのぼる。西村公助が最近資料紹介を試行した成法寺遺跡の土坑一括資料などはそれを証明するような土器の組み合わせであった。東瀬戸内を含む西方の吉備集団が持ち込んだ日常土器が同じ穴から出土しており、そこに弥生後期形甕が進化して内面ヘラケズリ技法を用いた土器と化している。複数存在する土器は変化に富み、かつ外面タタキも左上がりを含み、突出タイプの平底の甕は一点もない。最古の庄内形甕で、かつ大和産ではない組成を示す。

最古の庄内形甕は従来認識とは齟齬を持つかもしれないが、その探究の手がけっして頓挫したわけではない。現状では大和より一歩以上河内が古いと思われる。解明すべきはヘラケズリを実態としてどのように取り入れたのか。その製作のアトリエのレベルまで究極の問題として検証する必要があり、書いてきたこのようなエッセイで触れる問題ではないだろう。さらに関川・米田・西村や原田昌則ら研究仲間と研鑽を重ねたい。新型コロナウイルス蔓延の集団濃厚接触のニュースと重ねつつ最近の土器研究の実情に関する接触問題について言及してみた次第である。

パンデミック現象と邪馬台国

安本 美典

新型コロナウイルスが、猛威をふるっている。

世界的にみて、感染者数が、急激にふえている。

このような現象を、パンデミック(世界的大流行)現象という。

世界の感染者数が、累計で、10万人を越えたのは、2020年の3月7日、20万人を越えたのは、3月18日、30万人を越えたのは、3月25日、80万人を越えたのは、3月31日であるという。(米ジョンズ・ホプキンス大学システム科学工学センターのまとめによる『朝日新聞』の報道[4月1日号朝刊]。)

イギリスの古典派経済学者のマルサス(1766~1834)は、その著『人口論』の中で、食料は、等差数列的に増大するが、人口は、等比数列的に増加すると述べた。

等比数列的に増大するとは、たとえば、人口が、100年間で倍増するとすれば、その次の100年間で、また、さらに倍増するというようなモデルである。

銀行にお金を預けるばあいでも、複利でふえる預金をすれば、一定の利率で、元利合計は、等比数列的に増加することになる。このような増加の曲線は、「指数曲線」というカーブで表現できる。

ところが、パンデミック現象のばあい、感染者数の増加は、等比数列的な増加よりも、もっと急激に増加している。「指数曲線」は、あてはまりがよくない。じつは、人類の人口のばあいも、ここ2000年ぐらいをとれば、

「指数曲線」のあてはまりは、あまりよくない。

世界の総人口そのものが、近年に近づくとつれ、パンデミック現象的に増加しているのである。

このようなばあい、「指数曲線」よりも、「双曲線」のほうがずっとよくあてはまる。

日立造船株式会社の専務取締役で、近畿数学史学会の会長であった桑原秀夫氏(1896~1988)は、すでに、このことを論じている。

桑原秀夫氏は、1963年に『日本古代人口』推測についての一考察」という論文を、『古代文化』誌、第10巻、第1号に発表している。(この論文は、『季刊邪馬台国』34号 [1987年、梓書院刊] に転載されている。)

桑原秀夫氏は、この論文の中で、多くのデータにもとづいて、次のような、法則的仮説をたてる。

【桑原秀夫のたてた法則的仮説】

過去に時間をさかのぼるばあい、 χ 年を要して、人口が半減したとき、さらにその人口が半減(はじめからいけば四分の一に減)に達する場合の年数は、 2χ 年である。

この仮説にもとづくとき、人口の増大について、「双曲線」がみちびき出されるのである。

この、人口のパンデミック的増大の仮説によるとき、人口は、近年に近づくとつれ、急激に増加することになる。人口は、はじめはゆっくりとしか増えず、ある時点から、急激に増えることになる。

人類の人口は、パンデミック現象的に増大しており、新型コロナウイルスは、その人類に便乗する形で、パンデミック的に増大しているのである。

この、双曲線的増大の仮説により、時間を、古代の方にさかのぼらせるとき、人口の減少のしかたは、指数曲線のばあいほどには、急激には、減少しないことになる。

古代にさかのぼるとつれ、人口は、ゆっくりと減少することになる。数百年間、人口は、それほどまでには、変わらないという現象がおきる。

『魏志倭人伝』には、「邪馬台国の戸数は7万余戸」、「投馬台の戸数は5万余戸」、「奴国の戸数は2万余戸」などと「戸数」が記されている。

「倭の諸国」の戸数の合計は、「15万余戸」となる。

1戸を、かりに5人とみても、総人口は、75万人以上となる。この人口は、とても、九州の範囲の中には、おさまきれない、とする議論がある。

しかし、人口が、双曲線的に増大するとするモデルによるとき、倭の人口は、十分に、北九州の範囲におさまることになるのである。

このことについては、拙著『卑弥呼の墓は、すでに発掘されている!!』(勉誠出版、2017年刊)の中で、ややくわしく論じた。

横軸に、時間を取り、それを x とする。縦軸に、その時間のときの人口を取り、それを y とする。

すると、人口の増加率(増加の速度)は、 y を x で微分した値に比例することになる。

「指数曲線」のばあいは、この増加率は、そのときの人口 y に比例することになる。

いっぽう「双曲線」のばあいは、この増加率は、そのときの人口 y の値の2乗、つまり y^2 に比例する形となる。つまり、人口の増加の法則は、微分方程式の形で表記すれば、非常に簡単で、かつ、きれいな形で統一的に説明できることになる。

なお、パンデミック現象のばあい、一定の時間が経過すると、与えられた条件のもとでは、それ以上は、個体の数(ウイルス感染者の数や人口など)が増えないという限界に達する。

このこともあわせて考えるばあいは、増加の曲線は、「ロジスティック曲線」という曲線の系列の曲線となる。

春をいたむ歌一首

世の中は、コロナコロナで荒れにしを、

昔ながらの、さくら花かな。

会 員 投 稿

七支刀の製造年を再考する

伊藤 雅文

年初の東博「出雲と大和展」で七支刀の現物が展示された。よく今日まで伝世したものだと思心する一方、製造年についてはどうしても納得できない気持ちを強くした。

七支刀の製造年は剣の両面に金象嵌された銘文に「泰□四年」と記されているが、二文字目の□部分が判読不能で縦線一本が見えるのみとなっている。そして、この□の部分に「和」の文字を充て「泰和四年」と読む説がほぼ定説となっている。その根拠とされるのは、『日本書紀』神功皇后撰政紀五二年条の「百済の久氐らが来倭し七枝刀を献上した」という記事である。

定説に至る考え方は、「神功皇后五二年は日本書紀の設定では二五二年だが、それを干支で二巡一〇年繰り下げると三七二年となる。その三年前の中国の元号に『太和四年』がある。だから、七支刀は三六九年に百済王が製造し三七二年に神功皇后に奉ったものである。『泰』は『太』の仮借文字であろう」というものである。

七支刀と七枝刀を同一とし、泰が太の仮借文字とする見解に異論はないが、製造年の三六九年には非常に大きな問題があると考えられる。太和は中国東晋の元号であるが、百済王餘句が東晋に初めて朝貢し冊封体制に入るのは三七二年である。将来、敵対する可能性のある東晋の元号を、倭王に献上する剣に記すはずはないのである。また、東晋は三七一年に「咸安」に改元する。古い元号を記した剣を献上するだろうか。

そもそもこの定説が誤ったのは、『日本書紀』紀年論として一二〇年下らせることに固執したことだと思われる。神功皇后の前後をすべて一二〇年下らせるなどというのは実質上無理であるのに、そこだけをピンポイントに採用した弊害といえよう。

では正解はというと、「太元四年(三七九年)」ではないかと考える。太和四年のわずか一〇年後であるが、すでに東晋の傘下に入った後である。「百済本紀」によれば、この年に東晋に朝貢しようとしている(ただし失敗)、『梁書』には太元年間に百済王須が生口を献上したとある。当時、百済は高句麗と熾烈に争っており、晋や倭と結んで優位に立ちたかったはずである。当然、倭にも使いを出したと思われる。それが久氐らではなかったか。

結論として、個人的には、七支刀は三七九年に百済の近仇首王が製造し、当年もしくは間もない年に日本の仲哀天皇に献上したと考えているが、二文字目が剣身上から消滅してしまった現状では、真実は歴史の闇の中というしかない。

『水行10日陸行1月』は纏向への旅だった

槌田 鉄男

『水行10日陸行1月』は江戸時代から続く邪馬台国論争においてずっとその主役だった。そして、この旅程をもとに多くの人が邪馬台国の場所を求めてきた。しかし、誰もが納得できる解は未だに見出されていない。これほど長く議論されてもその答えにたどり着けないのはこの情報が間違っただけのものか、それとも信用できないものだったからに違いない。

筆者は昨年10月『九州の邪馬台国 vs 纏向の騎馬民族』と言う本を出した。この本の主旨は3世紀の日本に騎馬民族が来たと言う新しい仮説の証明だが、この仮説を解く過程でこの旅程の持っている矛盾に気付き、謎を解く手がかりを得る事ができた。

266年の晋への朝貢がヒントになる。九州説を唱える山科威氏は全邪馬連の研究発表会の場でその時の朝貢は邪馬台国東征後であり使者は纏向からの旅程を報告したとしている。そして陳寿がそれを勘違いして魏志倭人伝に記載してしまったと言うのだ。

筆者は九州説だが東征説ではない。ヤマト王権発祥の地である纏向遺跡は3世紀の奈良に誕生した。そうすると卑弥呼がいた九州の邪馬台国と並存していたことになり東征説は成り立たない。纏向遺跡からは九州の土器がほとんど出ていないのもその理由である。そのため、一般的な東征説では纏向遺跡の誕生は4世紀としている。

266年の朝貢を梁書でみると『また卑弥呼の宗女・台与を王にした、その後再び男の王が立って並んで中国の爵位を得た』とある。卑弥呼の後を継いだ台与と共に男王が並んで爵位を得たと言うのだ。この時の男王が誰だったのか昔から議論されてきた。266年時点では纏向遺跡は誕生していた。そうするとこの時の使者は邪馬台国の台与と纏向の男王の2人の使者だったとすれば、全て辻褄が合う。筆者は纏向遺跡を作ったのは騎馬民族の扶余と考えている。そしてこの時点で邪馬台国を征圧していた。その使者は奈良から中国山地を馬で1月かけて縦断し、島根県の石見辺りで日本海側に出たと考える。そこから船で九州まで10日。九州から晋までは台与の使者と共に旅したことになる。

そしてこの使者は晋の役人に陸行1月水行10日かけて邪馬台国から来たと言ったのだ。この時点での倭王は邪馬台国の女王・台与だったからだ。これを聞いた役人は邪馬台国に行くには水行10日陸行1月かかると勘違いする。陳寿は268年から晋で三国志を書き始めた。役人からこの話しを聞いた彼も当然、勘違いした。そして魏志倭人伝に邪馬台国への旅程を『水行10日陸行1月』と書いてしまったのだ。このことが邪馬台国論争を300年も長引かせるものにしてしまった。

2020年3月4日

本誌第9号において尾関郁氏は邪馬台国の位置をめぐる学説の真偽を測定する装置を提案しているが、異議を申し上げたい。

まず i 方角について。「東へ約九十度ずれている説は、壱岐が対馬の東に無ければ整合しない」という。だが方角が約九十度ずれているのは不弥国から先の部分だけであって、帯方郡から末盧国までの方角にずれはない。もともとの資料が異なっている箇所であるから、記事が整合しないという問題はそもそも発生しない。

ii 距離について。「末盧国から二千里は……一里百十メートル前後で計算すれば岡山に届かない」というが、私見によれば帯方郡から女(王)国までの旅程は日数を表わしており、末盧国から女国までの距離である二千里は松浦市から朝倉町までの陸行十日(一千里)と朝倉町から吉野ヶ里までの水行一日(一千里)の合計を表わす数字である。不弥国から先の日数記事はこれとは別の記事であり、文字通り投馬国や邪馬台国までの水行の日数を示すものである。

iii 人口・面積について。「漢書地理志の一戸約五人の記述から七万戸は約三五万で、大きな湖・湿地帯が想定できる奈良では無理」というが、七万戸は元の資料には七万人とあったと推計される。従って湖の干拓が終わった後の奈良盆地でも十分に居住の可能な人口であると計算される。推計の根拠であるが、太平御覧に引く魏志の初稿本には投馬国の人口は「戸萬」とあって元の資料には五万人とあったことが推計される。同じ様に邪馬台国の人口も元は七万人とあったと推計される。おそらくは陳寿が人数を戸数に書き換えた箇所である。饒速日の子孫が開発した纏向の人口は陳寿の時代には約七万人であったと推計される。

こうして見れば尾関提案には客観性が欠如していると言わざるを得ない。更なる議論が必要であれば、再反論も歓迎するし、討論型研究会を開くことも一案である。(2019年12月12日 記)

倭奴国の金印は偽物であった

紀元後25年光武帝が前漢の混乱を収めて後漢国の設立に成功した。

その混乱期に中国を脱出し居住先を探して半島に移住してきた倭人たちが作った国が伽耶連合諸国と呼ばれている国々で中国では「倭国」と呼んでいる。

その盟主を務めたのは半島の南端、金海に位置する金海伽耶(加羅)国で紀元後42年に誕生した。この国名が当初「奴(ぬ)国」と呼ばれ後漢では「倭奴(わぬ)国」……倭の奴国と称したと推定する。倭奴国が誕生して15年、国内も安定し国民の生活も向上した。後漢も30数年経過しているので信頼できる光武帝の保護を授けてもらおうと奴王は安曇氏を57年洛陽の光武帝に使いした。後漢王は「倭奴国」を冊封し金印を与えた。この時の金印が江戸時代に福岡市滋賀島から発掘されたがこれが本物かどうか検討課題になっている。

工芸専門家の工芸文化研究所鈴木勉先生は彫金の技法、線の太さ、肥瘦の変化などから江戸時代に製作された可能性が高いと指摘した。安本美展先生はお手本なしにこのような独創的な印鑑は作れないことから本物であると主張した。本物が実在し奴国を福岡市近辺のどこかに設定したい人物が金印のコピーを作って、全く関係のない滋賀島に埋めたと推定する。あたかも農民が偶然発見したように装っているが全てが仕組まれたストーリーであろう。地下に長時間埋められているのに表面が輝いているとか、付近から弥生時代の遺跡が全く出てこないとか不思議なことが多い。本物の所在地は全く不明だが、下賜された当初は金海の王室か海神が居住していた和多都美(わだつみ)神社周辺に保管されていたと思われる。半島にあった王室が列島に移住する際日本に持ち込んだ可能性は高い。だれが仕組んだかは江戸期にそのような彫刻のできた人物をさがし出すのが一つのヒントであろう。1世紀の九州には環濠集落はあちこちに存在していたもののそれをまとめて国家にする必要はなかった。

尾関郁氏ご投稿「ジャマイチ国」について

尾関郁氏は本紙第9号にて、未だに五十に及ぶ邪馬台国所在地論争の混乱を憂慮され、これ等を整理し、北九州説に収斂・統一するための判定基準(氏によればフィルター)をご提案されている。邪馬台国北九州説を支持する小生も、このご提案には大賛成であるが(2~3の項目に問題がありそうだが紙面の関係でここでは論評しない)、肝心の「邪馬台国」を何故「ジャマイチ国」と表記されているのか理解に苦しむ。これでは、折角邪馬台国論争の混乱を整理されようとするご意向とは全く逆に、論争にまたまた無意味な混乱の種をまかれているのではなかろうか

そもそも、日本の古代には濁音で始まる地名や国名は無く、その後出現する濁音で始まる地名(備前、豊後、

岐阜等)は、日本が漢字を導入し、地名や言語に音読みで採用するようになって始めて命名されている。当然、卑弥呼時代には「ジャメイチ国」などと呼ばれる国や地名は何処にも存在しなかった筈である。

「邪」は、現代中国語では(xie)または(ye)と発音されるようだが、古代の呉音では(ジャ)漢音では(ジャ及びヤ)と発音されており、魏志倭人伝編纂に関係した魏や西晋は北方系漢族の国家であったので、当然「漢音」を使っていたと考えられる。

また「馬」の音は(マまたはバ)であり、(メ)と読むのは、我が国独自で漢字熟語を作った時に用いた字音語で、「駿馬や神馬」のような場合にのみ発音されるようで、(メ)の読み「馬」を当てることはあり得なかった筈である。

現在に残る魏志倭人伝の紹興本や紹熙本に書かれた「邪馬壹国」の「壹」は、明らかに「臺」の誤写であった。(その詳細な説明は紙面の関係で省略しますが、拙著「日本書紀・古事記編纂関係者に抹消された邪馬台国」98ページをご参照ください)

当時文字を持たなかった倭人が「ヤマタイ」或いは「ヤマト」と発音していたのを、魏の使節など関係者が、「邪馬臺国」の漢字に充てて表記したものであろうことは、今や殆どの研究者が周知の事実であり、同時に前記に詳述した根拠からも、魏志倭人伝に書き遺された「邪馬壹国」は、「ジャメイチコク」ではなく、「ヤマタイコク」としか読めないのである。現実には、北九州には「山門」と言う地名が、また、奈良県には、邪馬台国を継承して成立した「大和王朝」や「大和」の地名が残されている。

真摯な研究者の多くは、こんなことは先刻ご承知の事実であり、本誌9号に掲載された「ジャメイチ国」の表記などにはさしてご関心もなく、完全に無視しておられるようだ。

しかしながら、邪馬台国や古代史の真実を学術的に解明することを目的とする全邪馬連の機関紙「邪馬台国新聞」に、学術的根拠の乏しい「ジャメイチ国」の表記が問題視もされず、そのまま通り通るようでは、全邪馬連や本紙の正統的な権威にも拘わると憂慮し、また尾関郁氏は当会の古代史研究に非常にご熱心な会員でもあり、今後も貴重なご投稿があると期待して、敢えて失礼をも顧みず、「ジャメイチ国」の不適切な表記をご指摘申し上げた次第である。

邪馬台国探しは原典「魏志倭人伝」に還れ

山田 昌行

邪馬台国を探す唯一の客観的文献史料である「魏志倭人伝」があまりにも無視されていることに我慢できなくて2007年に『邪馬台国・日向への道』を上梓しましたが無視されつづけています。著名な人文学者・西尾幹二博士が『国民の歴史』(扶桑社1999年)で、「魏志倭人伝」を「こんな疑わしいものは歴史史料に値しない」ときこおろし、今は考古学的アプローチが邪馬台国探究の主流のようです。

しかし魏の公式使節(魏使)が倭国へやってきた(正始元年240)目的・ミッションは何かという観点から吟味して読めば、字義どおりで邪馬台国に至り、距離(日数)が長すぎるという指摘はあたりません。

魏使は国勢調査として倭連合諸国を巡行した

魏使来倭の目的・ミッションは、倭国朝貢(景初二年238)の遣使の帰国を送りながら倭の遣使を伴って、倭の諸国を巡行することだった。魏帝の詔勅には、豪華な下賜品を「還り至れば汝の国中の人に示せ」とある。倭国に近い宿敵の呉を牽制し魏帝の威徳を誇示するためである。外交の窓口である伊都国をさしおいて、魏使が連合西端の末蘆国に上陸したのは、諸国を偵察(国勢調査)して倭人伝を書くための巡行の第一歩であった。

末蘆国・伊都国・奴国までは問題ないが、次の不彌国の比定が曖昧だ。倭人伝では次の投馬国へ「南水行」とされているから、海に面したところであり、纏向説では南は東の間違いだという。北部九州説でも十分吟味されていない。

不彌は今も残る宇美で、のちに大宰府が置かれた、九州の東西南北の交通の要衝だったと比定する。不彌国からは次の国への距離が里数から日数に変わるのは、帯方郡の資料に距離のデータが無かったから。邪馬台国へは、筑後川筋をさかのぼる日田往還に行くのが通常のルートで、それが帯方郡から「万二千余里」であった。律令時代、日向の庸調はこのルートを牛馬で大宰府に運ばれたが、延喜式によれば、所要日数は上り12日、下りの空荷は6日が標準とされていた。

女王・卑弥呼に早く確実に金印紫綬と魏帝の詔書を手渡すため、難升米と特使・梯備は、このルートを取り、魏使一行も帰りはここを通ったであろう。

不彌国と投馬国の比定を等閑にしているかぎり、邪馬台国は見つかるはずがない。

投馬国まわりは魏使ミッションの特別ルート

不彌国から投馬国へは「南水行」。水行は海上とは限らない。筑後川の支流・宝満川を川舟で下る。倭人は役畜の使用法を知らなかったから、荷駄の運搬にはできる限り川舟を利用した。大河・筑後川には橋が無かったから、そのまま舟を進め、有明海に出て宇土半島基部の投馬国の都邑に着いた。水行二十日。

魏使のミッションとして、魏の宿敵・呉と対面する戸数5万の大国・投馬国へは、遠まわりしてでも行って内情を偵察しなければならなかった。帯方郡の資料には里程が無かったので日数で表すほかなかった。

投馬国は、ほぼ熊本県域で、今も球磨(郡・川)・熊本(県・市)・隈の地名がある。倭人の発音「トゥマ」を魏使が「投馬」と音写したのであろう。当時の発音はカ行とタ行が未分化であった。壱岐が一支(一大)と記されたのも、キの音がチィと発音されていたためであろう。その名残が今も幼児語や方言などに見られる。

邪馬台国へ水行十日陸行一月

投馬国からまた内海・八代海を南行十日、邪馬台国領域の川内に着く。ここにはニニギノミコトの墓といわれる陵があり、のちに日向から分離した薩摩国の国府が置かれた地である。

ここから川内川筋をさかのぼり、峠を越えて大淀川筋に出る九州山地横断に1月を要した。一瀉千里の旅ではない。帰還パレードである。季節は真夏。一1月の行程は長すぎではない。この間に倭国の風俗や植生などを興味深く観察している。

邪馬台(壹)国は戸数7万。倭連合諸国一の大国で、官が他の国は1名なのにこの国は4名いた。のちの薩摩・大隅・日向・豊後の4地域にまたがる広大な領域を有していたのであろう。これは倭人伝の「女王国東渡海千余里複有国皆倭種」と整合する。国の東は海(日向灘)である。

狗奴国との抗争の渦中で女王・卑弥呼死す

もともと「不属女王」で女王と不和だった狗奴国(後漢書では拘奴国)は、卑弥呼の晩年、抗争をエスカレートさせてきた。卑弥呼は魏へ支援を要請し、張政等が軍事顧問のようなかたちで到着したが、「年已長大」だった卑弥呼は死んだ。そして「径百余歩」という大きな冢がつくられた。西都原の男狭穂塚。これは巨大前方後円墳のはしりである。

張政等が抗争にどうかかわったかは何も書かれていないが、ただちに停戦の和議がはかられたのであろう。張政は数年倭国に留まり、和議を主導した。

このころ魏は、宿敵・呉ばかりでなく、朝鮮半島で韓族の反魏の動乱に悩まされていたので、背後の倭国を頼りにしたかった。倭国の内乱を早く收拾し同盟国として後方支援を期待し(遠交近攻策)、東西倭国が合一して大きくなることは望ましかった。

戦争の混乱の收拾策として、卑弥呼の「宗女壹與十三」が擁立されて国中定まったという。

和議の内容は、将来の両国の統一を視野に入れた、次代を担う者の政略結婚ではなかったか。それは、『古事記』『日本書紀』の神武東遷とつながる。

ちなみに古代史のキーマン神武の存在が学会や教科書で無視されているのは、聖徳太子が遣隋使で味わった屈辱から、神武の即位(皇紀元年)を中国の辛酉革命説にならぬ、中国にも負けない、とほうもない古い時代、紀元前660年に設定したためである。『古事記』『日本書紀』もこれを神話的に踏襲しているのは、日本の古代史上、不条理極まりないことだ。

神武東遷後も、日向と大和朝廷との絆は良好で、崇神の東遷、応神の東征にも人材を輩出し、皇室に近習・采女や皇妃も出している。

有名な津田左右吉は、日向を「物資の供給も不十分で文化の発達もひどく遅れた僻陬の地・ソジシの空国がどうして皇室の発祥地でありえたか」と独善的中央史観で蔑視している影響からか、邪馬台国日向説は歯牙にもかかけられないほどマイナーである。(了)

特別投稿

魏志倭人伝・考古学・記紀・神話から読み解く邪馬台国時代の年代論

東京支部長 内野 勝弘

日本古代史の謎は偏った情報だけで解明することは困難であり、日本の文献、外国の文献(中国、朝鮮文献など)や考古学的に裏付けされた事実を考えあわせ「総合的に、科学的に日本古代史の解明を目指す必要がある」

① 邪馬台国解明は魏志倭人伝が出发点である

- ② 卑弥呼 = 天照大御神
- ③ 高天原 = 邪馬台国 = 九州 = 甘木朝倉
- ④ 神武天皇東遷説と九州地名の近畿への移動と銅鐸文化圏の終焉
- ⑤ 纏向の前方後円墳の築造時期は4世紀の崇神、垂仁、景行天皇の纏向宮時代
- ⑥ 記紀のイザナギ、アマテラス、スサノオ、ニニギ、神武天皇ヤマトタケル、神功皇后などは骨格において伝説に近い史実がありそれが神話化された。

魏志倭人伝・考古学・記紀神話から読み解く邪馬台国時代の年代

北九州	金印 奴国王・倭国王帥升 天之御中主神・国之常立神 奴国王・イト国王 邪馬台国王 イザナギ	倭国大乱 男王 卑弥呼 (天照大御神) 195生 210共立 248没(53歳)	男王 弟・高木神 = 難升米 220生 アメノオシホミミ 265没 224生 ニニギ 247即位260没 226生 ホオリ 260即位267没 228生ウガヤフキアエズ267即位275 244生まれ 神武 268東遷273即位 286没	台与 (万幡豊秋津師比売命) 237生 250女王 287没(50歳) アメノオシホミミ 216-250-265 男王	北九州各国
日向	倭国の大乱終結を桓・靈帝180年頃とし、卑弥呼共立を180年頃に16歳共立とすると84才没。女王期間66年。239年75才の時、魏に朝貢したことになる大陸の混乱が北九州に及ぶ				
出雲	イザナミの父王	スサノオ	大国主 (両系婚姻で領土拡大)	邪馬台国に国譲り	ニニギの子
大和 纏向					
記録	57 181 184 187 ~ 210 208 209 210 212 217 233 238 239 245 247 247 248 249 250 253 255 266 268 273 286 286 295 322 3				
漢委奴国王金印	107 倭国王帥升後漢に朝貢(奴国王、イト国王)				
土器	庄内式土器 (弥生時代)				
年代	180	200	250	300	

を基本スタンスにし

魏志倭人伝、日本神話、考古学から「大胆」に推測し事件に順番をつけ、年代表を作成した。

このように歴史年代に神話を重ねて、九州、出雲、畿内(纏向)を俯瞰してみると全体像が明らかになり纏向邪馬台国論の矛盾も見えてくる。

時代の年代論

新・作成 内野 勝弘 2020.03.10

北九州各国に巫女王

男王 (倭国分裂)

アマテラスの
第二世代・出生仮説

ニニギの子 第三世代

国譲り

古代は、一夫多妻制の母系社会であり父子継承(記紀)より、兄弟・異母兄弟・親族の継承が多い。

- 父子継承率・神武-仁徳(93.8%、16人中15人)(記紀より)
 - 5-8世紀20%
 - 9-12世紀48.5%
 - 13-16世紀51.7% (安本美典資料より)
- 神武-崇神(1~10代)は20%とみる(親子継承、神武・崇神のみ)
- 応神-桓武【35代9名】25.7%桓武-後鳥羽【32代16名50%】(内野)

九州から大量の移民
九州邪馬台国の衰退

(IV)纏向 大都市

九州の地名の近畿への移動

銅鐸祭祀から三種の神器祭祀、鉄武器、三角縁神獸鏡(江南の銅)墓制(九州+出雲+吉備の前方後円墳)

石塚→勝山→矢塚→東田大塚→ホケノ山→雲墓

纏向の宮
磯城瑞籬宮
纏向珠城宮
纏向日代宮
王都

大和王権の全国拡大
前方後円墳の全国広がり

南、狗奴国はどこ? 熊野、東海?

国力の増強
行政・整備
海外の情報入手
新技術

(V)海外進出

ナショナリズムの高揚
大陸文化の伝来

- 朝鮮半島への進出
- 九州・朝鮮南部の倭人と共同軍事行動、鉄の争奪
- 巨大前方後円墳時代

渡来人の受け入れと先進文化の吸収
農業生産性の向上

(VI)全国統一

倭王、中国朝貢し国際的地位向上
中国南北朝時代の混乱
中央集権化進む
関東から九州、海外に巨大円墳の衰退へ

286	295	322	326~341	341	354	364	366	372	374	380	391	400	421	425	443	451	453	462	465	478							
341	354	364	366	372	374	380	391	400	421	425	443	451	453	462	465	478											
経靖・安寧・懿徳天皇時代(九州からの神武の異母兄弟、饒速日系皇后)	孝昭・孝安・孝靈・孝元天皇時代(神武の子供の第二世代)	大和から近畿に領土広がる、313高句麗が桑原郡、帯方郡を滅ぼす	開化天皇の時代・人口の流入(纏向古墳群開始)	崇神天皇(神武の孫・第三世代)天皇の権力強化(51歳没)	近畿から西日本・東海に領土が広がる 植民地政策	各地に四道將軍派遣領土、税が拡大、人口増加	国力・軍事力が増強・著墓築造開始・崇神陵築造開始	景行天皇 纏向日代宮 九州・東北に広がる 東征伝説	垂仁天皇 纏向珠城宮 ツヌガアラシトの来訪(渡来人の登用)	(九州邪馬台国を吸収)九州平定	新羅本記 倭兵が大挙して侵入(北九州と朝鮮南部の倭人) ヤマトタケル活躍	成務天皇 租税と屯倉 内政の充実、海外進出の基盤できる	地域支配制度の整備と国力蓄積	百濟から七支刀贈られる	仲哀天皇 九州征伐 朝鮮半島との外交	神功皇后摂政・朝鮮進出 鉄資源の確保、現地倭人の安全と連携	倭は海を渡り百濟新羅を臣民となす 海外戦争	この頃から巨大前方後円墳築造 渡来人材の流入	仁徳天皇(珍)(45歳没)河内に勢力基盤拡大	履中天皇(済・内野説)畿内に治水土木工事	反正文天皇	允恭天皇(済・安本説)	安康天皇(興)	雄略天皇(武)	宋に上奏文「東は毛人55国西は夷66国」	渡りて海北を平らぐること95国	宋書「新羅・任那・加羅・・・安東代將軍倭王」

讃: 413 420 425
 珍: 438
 済: 443 451
 興: 462
 武: 478 479

倭の五王(宋書)

布留式土器 (古墳時代)

須恵器

300
350
400
450

わが図書を語る

『新時代の天皇論』 日本橋出版社 1,296円 池間 忠次

タイトルからお察しの通り、この本は天皇や天皇制の存在意義を語ることをメインテーマとしており、純粋な古代史の研究書というわけではありません。

ですが、天皇の存在意義を示し、天皇制の始まりを求めて過去へと遡って行くと、結果的に「魏志倭人伝」に記された邪馬台国にたどり着くという内容になっています。

そのため、邪馬台国の比定地も従来の距離や方角、地名や古書古伝、発掘された遺物など等から推察しているのではなく、『魏志倭人伝』に記された卑弥呼や邪馬台国の制度的特徴から明らかにしており、全く新しい手法となっています。

また、結論を出す方法自体は全く新しいものですが、結論自体は数多ある説の中で「邪馬台国の会」の安本美典先生の説とほぼ一致しているというのも特徴的です。



『古墳に眠る大王(オオキミ)』 サブタイトル「古墳の被葬者を考える」 柴田 克彦

古墳を見て「この古墳に眠るのは誰か」これが国民の大多数の感想と思います。

つまり古墳研究の究極は、被葬者を見つける事であると考えます。

本書では、畿内の古墳編年から大王墳の築造時代を想定し、その各々の古墳の被葬者を選定する。それには、記紀の人物に拘らず客観性を重んじた選定を試みて、その時代を見通した古代史としてまとめたものであります。

そして畿内で営まれたヤマト政権は、箸墓から始まる前方後円墳という祭祀方式が継承され、同じ思想を持つ連続した政権が運営され、3世紀の邪馬台国から6世紀中頃誕生の大和朝廷に至るものと考えております。

その王統譜は初代を卑弥呼とし、天皇家の祖である欽明天皇へとした連続政権であったと考えております。

本書ご希望の方は、特価1640円(税込)にて、販売致します。送料別途360円

お申込みは、メール:yotsuhata@aol.com 又はお電話 090-3526-3347 柴田まで



九州の邪馬台国 vs 纏向の騎馬民族 文芸社 1,650円(税込) 植田 鉄男

箸墓から出た鎧は何を物語るのか。元エンジニアが新しい騎馬民族説を提案。見過ごされて来た魏志倭人伝の謎を解き明かし邪馬台国論争を決着へと導いた。

- ・遠絶でない邪馬台国になぜ『水行十日陸行一月』もかかるのか
- ・『黥面文身』と『朱丹を塗る』なぜ身体への装飾が2つもあるのか
- ・対馬国、投馬国、邪馬台国……5つの国名と4つの官名、なぜ多くの馬の字が使われたのか
- ・倭国の風習になかった殉葬がなぜ卑弥呼のでなされたのか……殉葬は扶余伝のみ
- ・千人もの死者が出た名前のない男王とは誰なのか

古代史最大の論争はなぜ果てしなく続いてきたのか。それはこの時代が古墳時代の幕開けの時であり、奈良に誕生した前方後円墳が急速に広がったと言う事実が目に向けられなかったからだ。列島各地への急速な前方後円墳の拡がり、それは交通手段の革新なしではありえない。馬が到来したのだ。



会員募集のお願い

古代史に関心をお持ちのお友達に声掛け下さい。以下の情報の一部でも結構です。お知らせ下さい。

氏名とフリガナ：、電話番号：、〒：、住所：、メールアドレス：

(月一のメールマガジンをはじめ、メール配信主体でご連絡しますので、ご家族のメルアドでも是非)

年会費は、入会時期により¥3000(4月～7月入会の方)、¥2000(8月～11月)、¥1000(12月～3月)となります。翌年度からは継続会員として4月～3月通年で¥3000を申し受けます。

全国邪馬台国連絡協議会(全邪馬連)

会員管理担当：種村 凱夫(090-8568-2462) メールアドレス：zenyamaren.kaiinkanri@gmail.com

〒105-0013 東京都港区浜松町2丁目2番15号 浜松町ダイヤビル2F